



始



特 223  
545

吉田冬葉著



俳句の作り方と味ひ方

東京交蘭社發行



## 序

私の俳句に對する根本的態度は昔も今も少しも變りのない事であるが、人生觀が年と共に變つてくると同じやうに、俳句に對する考へ方が多少變つて來ないとは云へないのである。その意味に於いて本書は、以前に著した拙著のそれとは、大分異つた作り方であり味ひ方であるといへよう。そして、作り方であり味ひ方であると同時に、最近の私の俳句に對する感想の表現でもあるのである。本書の「味ひ方」及び「俳句の變遷」に於ける作者の順序は、史實には少しも據らないで適宜に採録したものであるし、又各先輩の敬稱を略したことを斷つておく。

本書を著す上に於いて乙字先生著「乙字俳論集」今泉浦治郎氏著「韻文教授の原理と方法」馬場路臺氏著「俳諧史要上篇」藤本實也氏著「一茶の研究」に據るところが多かつたことを謝するのである。

635-24

# 俳句の作り方と味ひ方 目次

俳句の概念	(一)
俳句の鑑賞	(七)
先づ理解せよ	(七)
元祿時代(味ひ方一)	(九)
天明時代(味ひ方二)	(二三)
文化文政時代(味ひ方三)	(三一)
明治時代(味ひ方四)	(四〇)
大正昭和時代(味ひ方五)	(五五)
季語と季感	(七一)
古代歌謡に現はれたる叙景詞	(七一)

氣候風土と國民性	(七四)
詠歎に就いて	(七五)
自然の諸象	(八一)
象徴と季感	(八三)
主観と客観	(八六)
「季」重なり	(九二)
季語の特性	(九六)
人事俳句	(一〇一)
地方色	(一〇六)
形式と音調	(一〇九)
十七文字音調	(一〇九)
形式の變化	(一一五)

二句一章	(一一九)
句切	(一二三)
省略	(一二六)
用語	(一二九)
俳句の叙法	(一三四)
自然靜観(作り方一)	(一三五)
題詠に就いて(作り方二)	(一五一)
俳句の變遷(その一)	(一六三)
芭蕉以前の俳句	(一六九)
芭蕉時代	(一六九)
正風俳句の内容	(一八五)
鬼貫の「まこと」	(一八九)

燕村時代	(一四)
一茶時代	(一〇六)
俳句の變遷(その二)	(二二七)
子規時代	(二二七)
碧梧桐と其周圍	(二三四)
新傾向俳句	(二四一)
虚子と其周圍	(二四六)
乙字と其周圍	(二五四)
自由律俳句と其他	(二六三)
「層雲」「海紅」「生活派」の俳句に就て	(二六三)
「ホトトギス」派の寫生俳句に就て	(二七〇)
我等の進むべき道	(二八三)
(をばり)	(二八三)

# 俳句の作り方と味ひ方

## 俳句の概念

人生にとつて何が最も尊いものであるかといへば、それは宗教や哲學からうけるところの理想としての眞、善、聖でありませう。しかしながら、この尊い宗教も哲學も、たゞちに、我々の現實の所有となる譯のものではありませぬから、そこで藝術といふものの必要を見るに至つたのであります。

藝術は宗教を魂とし、哲學を背骨とし、具象性感覺を肉とし血として、以て、人の世に安樂淨土の世界を建立するものといはれてをりますが、實際その通りで、自然界を人の性によつて實現せしめ、それによつて悠久永遠の殿堂の信に參禪しやうとしてゐるのであります。いふまでもなく、俳句も藝術の一分野として存在せらるゝものであります。

俳句といふ名稱は、明和、元祿頃にも既に用ひられてあると、角田竹冷はいつてをりますが、

正岡子規は「既に一句獨立して一篇の文學なるものを、發句といふは當らず、須らく俳句と稱すべし。」といつて以來、實際に於いて俳句といふ名稱が普遍されたのでありまして、従つてそれ以前は何人でも發句と稱んでゐたのであります。

俳諧はもと／＼連歌の一體でありまして、後世に至つてそれが獨立して一つの藝術境を示すものになつたのであります。連歌は平安朝時代に、歌人が上の句を唱へて他人に下の句を促し、又は下の句を作つて上の句を他人に作らしめて、以て贈答としたるが如き、二人して一首の和歌を詠じたるに、その發生の基因があるのであります。即ち、その唱和の迅速であることを欲し、又その興味の多いことを望むの結果からしてその詞が次第に粗笨に流れ、その意味の諧謔を帶ぶるを免れぬところから、必然的に俳諧體の連歌を生ずるに至つたといふのであります。その一例として、源義家が奥州の戦に、安部貞任に向つて「衣のたては綻びにけり」と云つて、衣川の館の落つることにかけて詠じ、貞任はこれに對して「年を経し絲の亂れの苦しさに」といふ上句を以て應酬してをりますが、もうした連歌體が後に俳諧連歌を獨立するに至つたのであります。

俳諧連歌は上句と下句と各々獨立して、さうして各自一個の内容を有つものでありまして、三句四句以上連續して連續歌となり、後に上下長短三十六句を以て歌仙とし、又おなじく百句をも

つて百韻と定めたのであります。その他いろ／＼の形式はありますが、この歌仙なり百韻なりの最初の一句を發句といつて、全卷中唯一の獨立體なのであります。後にこの發句だけが全然獨立いたし、今日の所謂俳句になつた譯けであります。即ち「猿蓑集」の

市中は物のにほひや夏の月  
あつし／＼と門／＼の聲  
二番草取も果さす穗に出て  
灰うちたゝくうるめ一枚  
此筋は銀も見しらす不自由さよ  
たゝとひよろしに長き脇さし

凡 兆  
芭 蕉  
去 來  
凡 兆  
芭 蕉  
去 來

○ ○  
灰汁桶の雫やみけりきり／＼す  
油かすりて宵寝する秋  
新疊敷ならしたる月かけに

凡 兆  
芭 蕉  
野 水



ならへてうれし十の盃 去來  
千代経へき物をさま／＼子日して 芭焦  
鶯の音にたひら雪降る 凡兆

茲では二つの歌仙の表六句のみを書きぬいたのでありますが、この最初の發句

市中は物のにほひや夏の月 凡兆  
灰汁桶の雫やみけりきり／＼す 同

この二句の體が、今日我々が作つてをる俳句であります。

發句が俳諧連歌を離れて、單に發句だけ詠するやうにしましたのは飯尾宗祇ですが、それ以前にも

散る花を追ひかけて行く嵐かな 定家  
亂れ藻は角力草にぞ似たりけり 義家  
頼朝がけふの軍ぞ名取川 頼朝

夏山やおもひしけみのこかるゝに 重忠  
藤咲は折られぬ波の花もなし 行助  
遠山に雪ふる雪の絶間かな 專順  
月の秋花の春立つあしたかな 宗祇  
涼しさやけふから衣たつた姫 肖柏  
冬さむみ雪をならふるいらかかな 宗碩  
小田原やおもひのまゝに刈りあふせ 秀吉

など單詠發句として傳はつてゐるのであります。宗祇の單詠發句の起原とせらるゝ十九句の内  
で五句を擧げて見ますれば

舟見えて霧も迫門こすあらしかな 宗祇  
もみちしてなほみとりそふ深山かな 同  
とりもあへぬ幣はあらしの紅葉哉 同  
夕浪にかへるもあきやにしの海 同

斯の如きものがあり、兎に角、宗祇を以て發句單詠の開祖といふ事が出来るのであります。

叙情詩として、發達して來た和歌の上の句だけが、獨立して俳句といふ一つの新しい詩の分野びんやを創造するにはそれだけの内容があり、その内容が他の詩歌の浸潤を許さない特種なものでなければならぬ筈であります。俳諧の發生以前の連歌は、臺閣的文藝として上流社會間のみ行はれ、然もその法式など極めて窮屈なものであつたのであります。従つてその發達普及などは到底望まれないものであります。然るに荒木田守武、山崎宗鑑の兩人によつて、一躍平民文藝として世に訪うてから、特有なる我國の氣候風土の關係と、東洋の教養並にその風習とに相俟つて育まれて、俳諧獨立分野への發達を迅速に遂げたものと見らるべきであります。

形式の短小である俳句は、その必然的成果として、叙情の影をひそめて次第に叙景の影が濃厚になり、遂ひに叙景詩として詩の一分野を領するに至つたものであります。されば、叙景詩として古今獨歩の位置にあるのみならず、我が俳句こそは、今や大和民族個有の最短小詩形として、洋の東西に誇り得る一大藝術と稱さるゝに至つたのであります。

## 俳句の鑑賞

### 先づ理解せよ

俳句を作つて見度いと思つて、古人の句や現代の句を讀んで見るがどうもよくその意味が解されない。従つてどこがいゝのか、どういふところに味があるのかとんと見當がつかない。と、かういふ疑問を抱かれる方がすいぶん澤山あるやうであります。

折角俳句を作つて見度いといふ希望がありながら、俳句の面白味がのみ込めないがために、初志を捨て、しまはれるやうなことがあると、我大和民族詩としての俳句、世界に比類のない詩、さうした立場から云ひましても、最非共理解していたゞかなくてはなりません。

何事によらず、向上と進歩の伴はないやうな仕事程無意味なものはありません。假へば釣魚にしましてもさうでありまして、一匹も釣らないよりは、二匹でも三匹でも釣れる方が面白く、又ダボ鯊を釣るよりは鮒を、鮒を釣るよりは鮎を釣る方が遙かに興味が多からうと思ふのであります。これは皆釣魚の興味を別にした向上と進歩とに伴ふ興味でなくてはなりません。

俳句の場合でもこれと同じ道理でありまして、はじめてこの道へ入つて二三句出来るやうになつてからと、その一年二年と経つてからの方が、勞心としての苦しみも多いかはりに、それだけその上達に伴ふ興味が深いのであります。まして五年十年とつづけて句を作つてをりますと、もう俳句がなくては暮して行けない程その興味は多くなるものであります。これは俳句ばかりでなく總ての藝術がもつところの人生に與へる活力素なのであります。一句一句が活素となつて、我々の生活の根本的基礎を築いて行くといふ、重大なる使命をも含んでをるのであります。

初めて俳句を解して味はつた句や作つた句が、一三年過ぎると案外つまらないものに感じられ、又二三年過ぎて作つた句や味はつた句が、五年十年過ぎてから之を見ると思ひの外低徊なものであつたりする事は、むつかしい鮎釣りの興味から見た、ダボ鯊釣りのそれの如くでありまして、云ひかへれば鮎つりの妙味は、ダボ鯊釣りだけしか出来ないものには判り得ないのであります。

ます。

これと同じやうに、これから俳句を作らうと志さすものが、既に十年二十年と専心この道に處して作られた句を見て、すぐにその意味が判らないといふことは當然のことであらうと思ひます。これは繪畫に於きましても音樂に於きましても皆同じことでありまして、ことに年齢に伴つて移りかはつて行く人生觀からして、藝術の上にも變化があるのでありますから、一層その感を深くするのであります。そこで私は、先づ俳句の味ひ方をひと通り解していただいて、さうして後徐に俳句の作り方を述べんと思ふものであります。

## 元祿時代（味ひ方の一）

閑<sup>しづか</sup> さ や 岩 に し み 入 る 蟬 の 聲 芭 蕉

この句は芭蕉が「奥の細道」の旅に上つた時、羽前國尾花澤の清風といふ俳人の家に暫く滞在いたしました。その時山形領の立石寺は是非一度見ておく必要があらうと、その土地の人々に勸

めらるゝまゝ、同行の曾良と共に暑い盛りを七里、わざ／＼逆戻りをして立石寺に参詣したのであります。

「巖に巖をかさねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑らかに、岩上の院に扉を閉じて、物の音聞えず。岸をめぐり岩を這ひて、佛閣を拜し、佳景寂寞として心澄み行くのみ覺ゆ。」  
今「奥の細道」を見ますとかう書かれてあります。芭蕉と曾良は夏の暑い時の事でありませうか、尾花澤を朝早く出掛けて来たものと推定出来ませう。そしてこの立石寺へ着きました時は、まだ日は暮れませんでしたので、そのまゝ麓の宿坊に荷を預けておいて、身軽になつて山上の堂に上つたのであります。

巖に懸けられてある徑を這ひ上つたり攀ぢ上つたりして、こゝの堂かしの院へと参詣し、さうしてとある巖の鼻の木蔭を選んで憩やすんでをりますと、白日炎天に晒さらされて来た身が、俄に寂寞とした淨境に入つて来たため、たゞしん／＼として鳴いてゐる蟬の聲が耳に入るばかりでありました。かうした明暗の境にあつてこの句は詠まれたものであります。

あらゆる妄想や雑念が打ち払はれたあかつきの、磨き澄すまされた心の鏡にうつる自然の相こそ、ほんとうの實相でなくてはなりません。この實相を掴つかみ得た作品こそ俳句として最も價値あ

るものであります。これは立石寺の風光そのものが佳かつたばかりではなく、炎暑のもとを七里の道を歩いて来た苦しみが、この句の内観となつて預つてをることに、最も大きな注意を拂はなくてはならないと思ひます。「岩にしみ入る」は芭蕉の境涯に映じたところの、天然の氣象の微妙音でありまして、それは芭蕉の心境に問はなければ判ることの出来ない尊い心の聲なのであります。

荒海や佐渡に横たふ天の川  
芭蕉

「佐渡」は佐渡が島のこと、「天の川」は初秋の空にあらはる星の無數に集つて河の如く明るい現象をいふのであります。この句も「奥の細道」にある句でありまして、最上川を下つて酒田に出で、象潟を見て一路北陸を越路に入つたのであります。さうして出雲崎までやつて来ました。

「酒田の名残日をかさねて、北陸道の雲を望む。遙々の思ひ胸を傷ましめて、加賀の府迄百三十里と聞く。鼠の關を越ゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の市振の關に到る。此の間九日、暑濕の勞に神を惱まし、病ひ起りて事を記さす。」

かう「奥の細道」に書かれてあります。この句の出來たのは出雲崎又は今町（現在の直江津）

といふ説があります。

日本海の荒海は俄に漆黒のやうに暮れて来て、しかも晴夜の風につれて荒ぶる浪音は耳を聳するほど高いのであります。海面の暗黒になるに従つて反對に、初秋の空には燦爛たる星が、恰も河のやうに西から東へと、恰度佐渡が島の眞上あたりを掠めて横はつてをるのであります。かうした光景を眺めて「荒海や」と打つて出たのであります。一讀實に氣勢を奪はれるやうな大觀句であります。心身ともに疲勞にあつて、よくこの雄大な光景に氣をのまれずに詠じ得たことは、眞に芭蕉の偉かつたところであると考へられます。

鶯の身をさかさまに初音かな 其角

長い間の冬ごもりに春を待ちかねるは人情であります。その春を魁けて梅や椿が咲いて眼を樂しませ、鶯や雲雀が鳴いて耳を喜ばせてくれます。ましてあの清朗な鶯の聲は、馥郁たる梅の花と共に春を象徴してゐるかの感があるのであります。それ故に鶯の初音といふものは非常に珍重されたものであります。

この句は、鶯が梅の木か又柳の木に来てとまつたかと思ふと、身をさかしまながら、一聲初音

をあげた時の光景を、ごくありのまゝ寫し出した句であります。

鶯といふ鳥は一ヶ所にじつとしてをらない鳥でありまして、絶えずあちらの枝こちらの枝と、忙しく飛び移つてありく鳥であります。従つて雀などより身の動作も敏捷でありますし、枝にとまる事も自由自在であります。さうして枝にゐる小蟲を探がすために、身をさかしまにする事は習性のやうになつてをりますので、初音をあげた時もさうした姿勢であつたのでありませう。

また、さうした實際の光景を見て作られたものでないと假定いたしましたとしても、鶯の習性をとらへて、かく作り上げました事は實際の場合と同じく、作者がいかに事物に對して忠實な態度を以て見てゐるかといふことが判るのであります。

狗背のちりにえらるゝ蕨かな 嵐雪

「狗背」はゼンマイで蕨とも書きまして、山野に自生する一羊齒類であります。その嫩葉の卷縮するさまがわらびに似てをり、矢張蕨と同様食用となるものであります。

狗背の發芽するのは恰度蕨と同時期でありまして、蕨は本土一般に生えて又一般に食用とせられるのであります。狗背は關西方面では蕨ほどに食べないやうであります。

春の蕨折はその収穫を食用とする目的よりも、蕨の生える頃ほひの時候のよろしさから蕨を折りがてら野山遊びに杖を曳くものが多いのであります。家に戻つて一日の収穫であつた蕨を籠から取り出して見ると、歩いて来た野山が再び眼の前に浮び出して来て「あそこの雑木林には多かつた」「どこの澤邊のはよく肥えてゐた」「アラ狗背が交つてゐた。」等と楽しかつたことを語りあひながら蕨を撰つてゐるのであります。その蕨の中に交つて摘み入れられた狗背が、裏の方へ分け入れられるのを「狗背のちりにえらるゝ」と詠じ來つたものであります。

狗背と蕨と形の類似したものをとりあはせて、それを撰り分けてゐるありさまを、巧みに叙した味ひの深い作品であらうと思ひます。

何事ぞ花見する人の長刀なが去來がたな

春の花見は人生にとつて最も大きな行樂でありまして、散る花をよそに酒を鬨はすものもよし、花を遠くながめて茶會を催すもよし、花のもとに集つて俳筵を敷くもよいのであります。いづれもこの一日は浮世の中にあつて、浮世の事を花に忘れやうとしてゐる連中でありまして、

かうした多勢の花見の人出の中を、たゞ獨り深編笠をかぶつて、然も腰に長脇差をさして歩い

てゐる武士がおります。何んといふ武骨ものだらう。何んといふ無風流者だらう。——かういつて盃を口にあてながら笑ひ者にされたのが長刀の主なのであります。

友すれの舟に寝つかぬ夜寒かな 丈艸

陸ならば馬又は駕籠、水ならば船といふやうに、交通の便をかりたのは昔も今も少しも變りはありません。殊に京都と大阪の間を船で往來したことはあまりにも著名であります。

この句の場合も船での旅でありまして、これから立たうとする夜船が、客や荷物や食料品の積み込みのために出船にはまだ間があります。船中の退屈さに一寝入りしやうと横になつてゐると、夜寒さのためになか／＼寝つかれず、うと／＼としたかと思ふと、波や風のために友船と摺れあつては船が揺れる、その度毎にその音が氣になつて眼が覺めるのであります。

たとへ川船でも、船の旅に馴れないものは何んとなく落着かないものであります。船中の薄暗い行燈の下に寝ころびながら、遠い蘆の葉すれや、夜鳥の鳴く聲をきゝながら、しみ／＼夜寒さを感じてゐる作者の姿が眼にかぶやうであります。

十團子は駿河國宇津の山峠の茶屋で鬻いでをりましたもので、昔は十づゝを以て一人前とせられてゐたものと推定せられます。現在でも峠に茶屋はあるさうであります。團子は鬻いでをりません。最近の事ではありますが、静岡にをります友人が宇津の山峠を越した時、茶屋に休んだところ爐の近くの柱に團子のやうなものがつるしてあつたので、聞いて見たらば十團子だといふので貰ひうけたといつて私の處へ送つて來ましたが、それは一粒の大きさが大豆程ありまして、それが十粒づゝ糸に通して珠数のやうにしてあるのであります。その十團子から考へますと、食べ物として鬻いでをつたものとは考へられませんが、その考證は後の事といたします。

毎年一度や二度は東海道を道中する、その度に必ず宇津の山峠を越さねばなりません。さうして西から來ても東から來ても、峠の茶屋へは一休みといふことになります。この茶屋へ來て何より懐しいものは十團子で、峠の不自由な中に鬻がれるだけ一層その思ひがするのであります。阿部川の橋の袂で鬻がれる餅は、餅としては勿論十團子などより結構ではありますが、東海道中の險である宇津の山峠の頂上で鬻がれるといふだけ、十團子は道中をする旅人の懐しきものゝ一つ

であつたのでありませう。その十團子も年々小粒になつて、何んとなくこの山の中にも、ものあはれが感じられ、然かも旅人の往來のぼつたり落ちたといふ昨日今日は、吹く秋風が、茶屋の暖簾にも、茶汲女の鬢のほつれにも、また自分の腰かけてゐる床几の上にも吹き渡つて、うらさびしさが感じられるといふのであります。

## 首立て、鶉のむれあがる早瀬かな 浪化

鶉飼は岐阜の長良川で行はれますもので、野生の鶉を飼ひ馴らしまして、喉に金輪を嵌め長き紐をつけて鮎をとらしめず漁法で、一艘の船に鶉匠一人中鶉遣一人船頭二人が乗りまして、暗夜に篝火を焚き、鶉匠は鶉十二羽中鶉遣は五六羽の鶉を水中に操縦し、鶉のとつて呑みました鮎を吐かして漁獲するのであります。

鶉飼は川の上流から次第に川下に流しながら漁をし、又川下から川上へ上りつゝ漁してくるものであります。この句の場合は川下から川上へ上つてくる途中と見るべきであります。淺く然も非常な早瀬になりますと、鶉飼は出來ませぬから、その早瀬は漕ぎ上るばかりで、鶉匠も鶉遣も手を休めてゐるのであります。又鶉も水中に潜らずに舟と共に泳ぎ乍ら上る譯けであります。

今しも早瀬を漕ぎ上つてゆく鴨船が、瀬につれて起つてくる川風に篝火がなびいたかと思ふと、火の粉が美しく波間に流れてゆきます。その火明りに見ると、鴨共はいづれも首を立てながら早瀬を上つてゆくのであります。

皆一様に首を立てながら早瀬をむれ上つてゆく鴨の特性が、如何にも巧みに云ひ現はしてあるのであります。

道ばたに多賀の鳥居の寒さかな 尙 白

多賀は近江國の多賀神社でありまして、その多賀神社の鳥居は、神社から餘程はなれた道ばたにたてられてあるといふ事でありませう。

鳥居ばかりで神社の見えないといふのも一寸變つた景色であります。しかもそれが道ばたに忽然として立つてをるのは、四隣の景色とも不釣合なもので、何んとなく寒さを感じるものであります。大きい鳥居でもこれが杉並木とか森の入口とか、又は石段の上とかにあるのなればさうでもありませんが、茫莫として、何一つない枯野の真ん中に、ぼつねんとして立つてをるので一層寒さを感じたのでありませう。

有るべき筈のもので無いものが有つた時の、心の虚空を突かれた驚きから來る寒さでありまして、然もさうした主觀をよく客觀化し得て詠じ出されてあるのであります。

灰汁桶の雫やみけりきりくす 凡 兆

「灰汁桶」ア、ク、ヲ、ケと讀みます。野菜物などのアクをとるための汁を作る桶でありまして、灰を水に浸して取るのであります。「きりくす」は蟋蟀の古名でありまして、晩秋の頃草原又は畑或は庭隅、時によると土間や戸棚のかけなどの、薄暗いところで哀音を立て、鳴く蟲であります。

翌日灰汁の入用があるために、寝やうとしたのを急に思ひついて灰汁を作つたのであります。さうして安心して床に就きますと、土間の方でぼたりくすと雫の落ちる音が聞えて來ます。何んであらうと寝ながら考へて見ますと、それは今作つた灰汁桶の水が漏る音だと判つたのであります。起き出で見るほどの事もないのでそのままにして置きますと、やがての事にその雫の音も絶えんぐに止んでしまひ、恰度そのあたりでもありませう、蟋蟀がいとも妙なる聲で鳴きはじめたのであります。



秋の夜長の静かな趣でありまして、幽かに落ちてゐる灰汁桶の漏り音のやんだ頃から、哀れに鳴き出した蟀蟋の聲を寝ながらに聞いてゐる心境は、詩や和歌のそれとは異つた俳諧獨特の妙境であらうと思ひます。

灰汁を作るやうな桶でありますから、久しく用ひなかつた古桶で間に合はせたものでありませう、それ故に漏りはじめたのでありますが、灰がおのづから漏りを止めたのも、人の寝しづまる頃ほひから鳴き出した蟀蟋の聲も順序よく纏つてゐる作品といへませう。

川音や木槿 咲く戸はまだ起きず 北 枝

「木槿」はムクゲ、キバチス等と読みまして、錦葵科の落葉灌木であります。多く人家の垣などに栽培せられてあるもので、高さが一丈あまり枝葉が頗るよく繁る木であります。初秋の頃淡紅、淡紫、白などの美しい花を朝開いて夕方凋むのであります。故に「槿花一朝夢」と云はれる所以でもあります。

この句には「霧ふかき且渡月橋を渡りて北嵯峨に分け入る頃」といふ前書がありますが、この渡月橋は云ふまでもなく京都の嵐山に架つてをる橋であります。

川霧のたちこめた中の渡月橋を渡つて、松尾神社の方へ歩いて来る途に、霧の中にうす紅をにじませた、美しい木槿の花を見出したのであります。立止つて見ますと、それはまだ寝てゐる家の籬につくられた木槿でありまして、さうして、桂川の瀬音が、その邊までも心持よく聞えてくるといふのであります。

霧の深い朝の川音の趣きは又別でありまして、「川音や」と詠歎に置かれたのもこの場合遺憾のない叙法でありまして、さうして「木槿咲く戸はまだ起きず」と事のありのまゝを、飾らずに詠みおろしてあるところ、なか／＼尋常の手法でないものがあります。

名月や舟 蟲はしる石の上 桃 隣

「名月」は明月とも書きまして、仲秋十五夜の月であります。「船蟲」は甲殻類の節足動物であります、體色が黒く大きさ一寸ばかりで、複眼大きく觸角頗る長く、群をなして海岸の岩に棲んでゐる蟲であります。

あまりいゝ月夜のまゝ、海岸の方へ歩いて行きますと、道ばたの岩の上にゐた船蟲が登音に驚いて、さつと一時に散つてしまふといふのであります。

晝を欺くやうな月明りに、黒い岩かと思はれるほど集つてゐた船蟲が、一齊に四散してしまつて、岩膚が明るく一變した趣が、きはめて明瞭にあらはれてゐるのであります。

西瓜ひとり野分を知らぬ朝かな

素堂

「野分」はノワキと讀み、野の草を吹き分くる風でありまして、秋に入つてからの大風であります。

よもすがら吹き通した野分に、まんじりともいたしませんでしたが、夜がしら／＼と明けかゝると共に、さしもの大風も漸く衰へをみせて來ましたので、やれ／＼と安心をしながらも、心配であつた畑物の被害を何よりも先に見に出たのであります。粟や黍は根こぎにされ、芋や紫蘇の葉は破れて見るかげもありません。さうした戦場のあとのやうな畑を見廻つてをります中にも、たゞ巨體な西瓜だけは、宛ら野分がいつ吹いたかといつた顔で默然としてゐるといふのであります。

「西瓜ひとり野分を知らぬ」とやゝ擬人化して叙して來まして、さうして「朝かな」と置いて、野分が夜中吹き暴れた光景をあらはしてある點など、寸分の隙間のない句法であります。

## 天明時代（味ひ方の二）

夏川を越すうれしさよ手に草履

蕪村

この句は「丹波の加悦といふところにて」といふ前書があります。加悦はカヤと讀みまして、大江山の裏にあつて、與謝の海へ通ずる街道にある町の名であります。そこでこの句は作られたのであります。

橋もない譯けではありませんが、見るからにして美しい流れ、白い砂に丸い石、さうして岸を泳いでをる小魚の影、さうしたものをながめてをりますと、おのづから徒渡つて見たくなつたのであります。そこで尻はし折つて手に草履を提げたのであります。

夏川を徒渡ることが突然な思ひつきで、然も久しぶりであつたので、少年時代の事などが思ひ出されて思はず「うれしさよ」と出たのでありませう。

「繪團扇」は繪のかいてある團扇のことです。「清十郎にお夏」は近松門左衛門の戯曲五十年忌歌念佛、又は西鶴の好色五人女などに出てくる人物であります。

納涼臺かそぞろありきか、人目を遠くはなれてさゝやき乍らの若い男女があります。その二人のもつてゐる團扇の繪は、夜目にはつきりと判りませぬが、これも矢張り男女の繪がかいてあるらしいのであります。そこで團扇にかゝれた男女を、お夏と清十郎だらうとしてしまつたのであります。さうして、その繪團扇を持つてゐる若い二人のそれも、お夏清十郎のやうな間柄のそれであらうといふのであります。

燕村一流の巧みな描寫でありまして、繪團扇の繪がどんなものであつたか、又それを持つてゐた若い男女がどの程度の間柄であつたか、それはどうでもよいので、燕村の頭で描かれた理想の美化が、團扇の繪も、若い男女も、戯曲にあらはれるやうな、美しいお夏清十郎に仕立て上げてしまつたのであります。

寢よといふ寢覺の夫や小夜砧

太 祇

「砧」はキヌイタの略でありまして、布帛を槌で搗つ木石の臺をいふのであります。現今では殆ど見る事がありませんが、昔は婦人の仕事として大抵の家にはあつたものであります。「小夜砧」は夜中に打つ砧をいふのであります。

秋の一日の忙しい仕事も済んで夕餉を終りますと、夫は疲れのために早く臥床へ這入ります。妻はあと片つけ明日の仕度を調べ、さうしてよなべ仕事の砧を、をりからの月を幸ひに庭に出て搗ちはじめたのであります。ひと寢入りした夫がふと目が覺めて見ると、妻はまだ起きて庭で砧を打つてをりますので、何んとなく自分ばかり先へ寢てしまつたのが妻に對して氣の毒にも思はれて、雨戸をほそ目にあけながら「あしたの事にしてもう寢たらばどうだ——」といつたのであります。

夜の更くるも知らず夫のためと砧をうつてゐる妻の心、それを哀れむで寢よといふ夫の情、この二つのものが得も云はれぬ味となつて、この句にあらはれてゐるのであります。さうして、月かけにこぼれてゐる萩の花や、あたりで鳴いてゐる蟲の聲までが、この句を通して見え聞えるや

うであります。

途にありて手紙披けば春の風 几董

暮の會か花見のお誘ひか、町内の集會事か或は汐干の約束か、婚禮の相談か又は俳筵のお招きか、その邊はいづれでもよろしいのでありますが、兎に角既に一度招きを受けてをるのであります。それが何かの都合で時間までに行く事が出来ませんので、遅刻を心に詫びながら急いで家を出たのであります。一方確かに来る筈の人が来ないので、折角の會も初まらぬ始末であります。でもう一度手紙を書いて使にもたせて走らせたのであります。その使ひと途上でばつたり出會つて、念のために封を切つて立ち乍ら読んでゐる光景であります。

巻紙に認めてある手紙を讀んで行くうちに、右手に餘つて行く手紙の端が、春風のために翻つてゐるありさまが如何にもよくあらはれてをります。然もあるかなしの春風が「手紙披けば」によつて如實に表現されてゐるのであります。

十津河や耕す人の山刀 召波

「十津川」は十津川村の略でありまして、紀伊國の十津川に沿うた山中にある村であります。

「山刀」は樵夫の用ひる鈍のやうな刀をいひます。

山中寂として全く浮世を離れたやうな十津川村へ来て見ると、春の訪れはいづこも同じであると見えて、山畑を耕してゐる人もちらほら見える。さうしてこの邊の風俗は何んとなく他所と異つてゐて、腰のあたりに山刀を差して、あの鎌をもつ様子は、地からの百姓とは多少異つてゐるところがある。さういへばこの十津川村は昔源氏だか平家だかの落武者が茲に來て地着いたといふではないか。——かうした意味がこの一句に含まれてをります。

高い山と低い川との間に刻まれた畑、さうしてそこに散在してゐる農家、日に一度か二度通ふきりの旅人、さうした浮世に遠い靜かな村の趣がこの一句を通してよくあらはれてゐるのであります。

かたはらに大きな石や女郎花 月居

「女郎花」はヲミナヘシと讀みまして、敗醬科の生草本で山野に自生します。高さが二三尺ばかりで葉は對生し、下部のものは羽狀複葉であります。上部のものは細長い小單葉をしてをり

ます。初秋の頃粟粒のやうな黄色花を開いて、花莖共に纖弱な愛らしい花でありまして、秋の七草の一つであります。

二本三本の女郎花が咲いてをりまして、そのかたはらにこれは又とつもない大きな石がころがつてをるのであります。

簡単な句意ではありませんが、事物をありのままに寫生した句で頑固そのものゝやうな大きな石と、なよ／＼とした可憐な女郎花の對照は、作者の非凡な着眼によつて成されたものでありまして、それが「かたはらに」といふ大膽な表現法によつて成功してゐると云つていゝと思ふのであります。

まぎるべき物音たえて鉢叩 樗良

「鉢叩」はハチタ、キと讀みまして、十一月十一日は空也上人の忌日でありますので、京都紫雲山極樂院光勝寺（空也堂）では法會を行ひ、念佛踊を修し、これより四十八日間毎夜曉に至るまで、寺僧が洛中洛外の火葬場をめぐるつて、高聲に念佛和讃を誦し、竹杖で携ふところの瓢を鳴らし、無常を唱へながら施物ある時はその瓢にて受けるのであります。瓢の代りに鐵鉢を用ひ

ますのでハチタ、キといふのであります。

宵のうちは鉢叩の無常を唱へる聲も、鉢を叩く音も、市井の雜音にまぎれて聞えなかつたのが、だん／＼夜が更けて物音が靜まるにつけ、鉢叩の音のみが聞えるといふのであります。

冬の夜の淋しさが鉢叩の音によつて一層寂寥を感じしむるのであります。

山道の下に聞えて鳴子かな 関更

「鳴子」はナルコと讀んで板に竹管を括りつけてそれを竿の先につけ立て、繩を以て引いては鳴らす秋の稻田の鳥威しであります。道がだん／＼山の中腹へと上つて行きますと、稻田はその反對に谷の底の方になつて行きます。その谷の田で鳴子の音がしたといふので「それを山道の下に聞えて」といひ、そして「鳴子かな」と置いて、すべてを省略してしまつたところにこの句の面白さがあるのであります。

山路のひとり旅に聞いた鳴子の音でありまして、山彦をひいて消えてゆく淋しさは譬へやうのないものであります。

「天窓」はアタマと讀で頭蓋骨のことで、轉じては普通の頭のことです。「鮑」はアハビガヒの略で「土筆」はツクシであります、この場合は語を重ねてツクツクシと讀むのであります。

家の近くでもありません、鮑貝の殻が捨て晒しになつてをります、さうして鮑貝の孔から土筆が生えぬけてゐるのであります。

生えるところもあらうに鮑の孔から土筆が生えてゐる、何んともあ珍らしいことであらう。

——かういつた驚きがこの句になつたものであります。天然自然の不可思議は到底想像を許さないのであります、その不可思議に接することによつて俳句は生るのであります。

行燈に藥罐つりたる霜夜かな 曉臺

この句は前書に「貧學」とあります。「行燈」は昔燈心に油をしめして燈して明りとしたものであります。「霜夜」は霜の降る夜をいふのであります。

霜の降る寒い夜を、たつたひとり机に向つて學問をしてをるのであります。さうして藥罐の中の藥をあたくむるべく、行燈の上から掛けおろしてあるところでもあります。

行燈のほそくとした燈火に、藥罐をかけて藥をあたくむるといふ事は、火鉢の火さへもないといふ貧困のありさまで、その藥を飲む病人がかたへに寝てゐるのも想像出來ませう。薄暗い行燈の火かけで、たゞ一脚の机をたよりに一心に勉強してゐる。霜夜の悽慘なる光景が窺はれるのであります。

藥罐の中が藥でなく湯でありましても、この句の價値に少しも變りはありません、内容の緊密した句といへませう。

### 文化文政時代（味ひ方の三）

陽炎や手に下駄穿いて善光寺 一茶

「陽炎」は春日光のため水蒸氣が地上からチラチラと上騰するものであります、「善光寺」

は云ふまでもなく信濃國の善光寺であります。

一生に一度は参詣せねば極樂へ行けない——とはあまりによく知られた言葉であります。その善光寺へ不自由な躰の身分ではる／＼と参詣しに來たのでありまして、その躰の歩むありさまを「手に下駄はいて」といつたのであります。

千里の道も一歩からといふが、あゝして足の無い人間が手でゐざりながらもよくやつて來れたことだ、それも善光寺様へ参り度いといふ一心からで、いよ／＼善光寺様の御利益のあらたかなことがわかる。——などとその躰を見て話しあつてゐるさまが、この句を通して想像されるのであります。

遅々としてゐざつてあるく躰に對して、地上から燃えるが如く消ゆが如く、又有が如く無きが如き陽炎を配した點、しかも「手に下駄はいて」といつてのけた一流の見方は、さすがに一茶の獨斷場であらうと思ひます。

漏殿ぬいどのがおそろしいといふ衾あふかな

一茶

「漏殿」は雨漏のことをいふのであります。「衾」は寝るとき體の上を被ふ臥具でありまして、

今の掛蒲團であります。季節としては冬であります。

かういふ昔噺があります。ある一軒家で爺さんと婆さんが住んでをりました。毎日々々雨が降りつづいてゐますので、家のところ／＼に雨漏りがいたします。或る夜婆さんは起き出して蠟燭をともし「虎や狼より漏殿の方が恐しや」と獨り言をいひ乍ら漏受けをして歩いてをりました。

恰度その時一匹の虎が、その家の馬を盗まうとして忍び寄つて來てゐたのであります。婆さんの聲をきいて、世の中に一番自分が強いと思つて居つたが、漏殿といふえらいものが他にゐると聞いて、急に恐ろしくなつて虎は一目さんに逃げ出しました。すると家の中で寝てゐた爺さんは飼馬が逃げ出したと思つて、いきなりとび出して、逃げて行く虎のうしろから飛びつくのであります。すると虎は漏殿にとびつかれたと思つて無我夢中で逃げるうちに夜が明けてしまひました。夜が明けて見ると馬でなくて虎であつた爺さんの驚き方つたらありません。

かういつた筋の昔噺がありますが、今この句を見るとこの昔噺を一茶自身も知つてをるのではないかと思はれるのであります。雨漏りの事を漏殿といふ點に着眼したところ、それを衾に配して冬の夜のうらさびしい光景をあらはしたところなど、郷土的氣分をよくあらはしてゐると思ひます。

夕潮や柳がくれに魚分つ

白雄

34

「夕潮」は夕方満ちてくる潮のことです。「柳」は柳の芽出しをいふのであります。春季であります。

船をさして一日漁に出たのが漕ぎ戻つて来て、夕潮のさしてくる柳のかけに舟を舫つて、獲物の魚を二人か三人で分け合つてゐるのであります。

「夕潮」やと詠歌に出てありますが、これは單に潮ばかりでなく、潮につれての風や日の暮るるのも共に云ひあらはしてをるものであります。柳がくれに分けてゐる魚も、大きな魚でなく、白魚のやうな小魚である事が、一句全體を通じて判然とせられるのであります。

むらさきのひしこにかつや唐辛子

大江丸

「ひしこ」は「鯉」でありまして、ひしこ鰯のことです。干しては田作にする小魚のことです。この場合のひしこは「ひしこ漬」の略であります。ひしこ漬は鯉と生姜、穂蓼、紫蘇、唐辛子など、共に鹽漬けとしたものであります。

鯉漬のうすむらさきなるに、ごく僅かであるけれども赤い唐辛子の色はすぐれて見えるといふのであります。

酒の座でもありません、小皿に盛つて出された鯉漬に感興を覚えての即吟とも見られる句であります、かうした一些事でありましても、感興が乗つて來さへすれば面白い作品が得られるのであります。

春雨やなぐれてもどる植木賣

保吉

「なぐれて」は横ざまにそれて行くことで、「植木賣」は植木を荷にかついで賣りあるく人の事です。

この分ならば大丈夫と思つて出掛て來た雨が、途中から、かなりひどくなつたので、賣れる見込みもつかぬまゝ植木の荷をまとめて戻つて來たといふのであります。

この春雨には多少の風が伴つてゐるやうでありまして、横ざまにそれるやうに降るのであります。それゆゑに荷物の比較的嵩ばつた植木の荷を擔つては、まともにあるいて歸ることは困難であります。又このなぐれるには、商賣が春雨にはづれてしまつて戻るといふ意味も、多少含ま

35



れてゐるかとも考へられますが、そこまで深く考へる必要はなからうと思ひます。

菜の花や海少し見ゆ山の肩 五明

「菜の花」は種をとるために作られた油菜で、黄色の花がいちめん咲き満ちてゐる畑をいひます。「山の肩」は一つの山の肩のところを指すのであります。

晴るゝとも曇るともつかないやうな、どんよりと霞んだ日を、菜の花の咲きつゞいた果ての、うすむらさきに暮れてゆく山の肩に、夕日をうけて光つてゐる海が僅かに見えるといふ、遠望の光景であります。又菜の花の黄花に對して、紺碧の海をとりあはせたものとも考へられない事はありません、或はさう解した方が原句の目的であるのかも知れないのであります。両者いづれにしても、作者は小高い丘の上に立つて眺めた光景と窺はれるのであります。

草山や潮<sup>しほ</sup>じめりにかへる雁 成美

「草山」は草ばかり多く生えてゐる山でありまして、「かへる雁」は春になつて秋來た雁の北へ歸るのをいふのであります。

半島や海岸に近いところには、薄ばかりのやうな草山が多くあります。曇る日の多い春は、潮のために草が濕め／＼して何んとなく重苦しさをさへ感ぜられます。その草山の空をすれ／＼に北をさして鳴きつれて行く雁の群を見送つての吟詠であります。

日もすがら曇つた草山、胸を壓してくるやうな潮の香、哀愁をおびた歸雁の聲、さうしたものでよつて、何んとなく物憂い晩春を感じる事の出來得る作品であります。

たう／＼と瀧の落ちこむ茂りかな 士朗

「たう／＼」は「滔々」でありまして水の廣く大に流るゝ状態をいふのであります。「茂り」は夏季樹木の枝葉がさかんに茂つてをるのをいふのであります。

非常に簡単な叙法のやうであります。この簡単に叙したところが、却つてこの句の内容を活かしてをるものでありまして、これがもう少し複雑な叙法をとつたならば、この句のもつ感じはあらはれなかつたものと考へられます。内容に伴うて然るべき適切な表現法をとつたところは、恰度繪畫で云はゞ、墨色溢ふるゝばかりの樹木に、一刷毛の瀧を以てしたるが如きものであります。岩を描いたり、茶店を添へたりしたのはこの雄大さはあらはれないのであります。

新緑滴るばかりの茂りの中に、眞白な布を懸たるが如き大瀑布が轟然として直落してゐるありさまを、實に十七文字にして遺憾なく云ひ得たのであります。

家 ふ た つ 戸 の 口 見 えて 秋 の 山 道 彦

「家ふたつ」は家二軒といふことであり、「秋の山」は秋に入つて草木の色づきそめて、將に凋落せんとする山をいふのであります。

この句は今の埼玉縣入間川の奥の方へ吟行した時の句でありまして、秋の山のふもとに同じやうに似た家が二軒並んで見えます。しかも、その二軒共戸の口が開けつばなしであるところから考へて、いづれも農繁期の忙しさから、家を空にして稲刈りにでも出掛けてをるのであらうといふのであります。

茸狩にでも行つてこちらの山から、向ふ側の日當りのいゝ、明るい山の麓に並んだ家を見たのでありませう。いつばいに秋の日さしを受けた農家が、その入口だけ黒く見えてゐるありさま、白い鶏が四五羽門前で遊んでをり、柿が赤く畑に熟してをるといふ、極めて物靜かな山中の秋山家の光景を、「戸の口見えて」の巧みなる見方によつてあらはし得てあるのであります。

草 の 戸 や 疊 の う へ の 秋 の 風 定 雅

「草の戸」は、草や茅を以つて屋根を葺いた家のことでありますが、又自分の住宅を卑下していふ場合もあります。「秋の風」は秋ふく風をいひます。

草葺きの鄙びた家に住んでゐると、疊のうへまで秋風が吹き渡つて、心細さが一層身にしみるといふのであります。

晝飯を食べ終ると日課のやうにした晝寢の枕に、何んとなくひやゝかさを感ずる風が吹き渡るのであります。さう氣がついて見ると疊の肌ざわりもどことなくきふとは異つてゐて、暑い／＼と思つてゐたがもう秋になつたのだ、ましてかうした鄙びた住居は秋風が早く吹き渡るやうな氣がするといふのであります。疊の上を吹き渡る秋風に驚いての、晝寢さめでもあらう趣がよくあらはれてをります。勿論晝寢覺めと限つて見なくてもよいのであります。

薪 割 が つ か んで ゆ く や 猫 の 妻 素 檠

「猫の妻」は春季になつて猫が交尾期に入りますと、異様な鳴き聲をあげて交るのであります

す。それを「猫の戀」といひ、その牝猫の方を猫の妻といふのであります。

夜中うかれて歩いた牝猫が、夜明方飼主の家に戻つて来て、春寒のまゝ竈に残るあたゝまりを慕つて寝込んだまゝ夜が明けてしまつたのであります。そこへその家の下部が来て薪割りをはじめやうとすると、恰度薪割りに邪魔になるやうなところに猫が寝てゐるのであります。「こんなところをお前の寢床にされてたまるもんか」と一喝されながら、首筋を掴まれてだらりとなつた猫の姿を見るやうであります。

### 明治時代（味ひ方の四）

つゝじ多き田舎の寺や花御堂 子規

「つゝじ」は躑躅の花の事、「花御堂」は卯月八日釋尊降誕の記念に修する灌佛の御堂を、諸種の花をもつて葺き飾られるのをいふのであります。現今では四月八日に行はれるところもありますが、田舎では陰曆を守つて行つてをる寺がたくさんあります。

田舎の寺で灌佛會が修せられ、花御堂が本堂の眞中に飾られてあります。さうして、その寺の境内にはたくさん躑躅の花が、今をさかりと咲き競つてをるといふのであります。

田舎で灌佛會があるといへば、一村落の祭のやうな賑やかさで、手に手に甘茶貰ひの瓶をさげて、お寺の躑躅の花さかりを幸ひ、參詣と花見とをかねた遊山氣分で、境内には風船玉賣煮賣屋などの出店さへも張られて、あちらの樹かげこちらの岩の上などでは、御持參の鮓の折など開かれてゐる光景であります。

春に一番おくれて咲く躑躅の花の美しさと、その中の御寺の花御堂の美をかさね、さうしてそれを田舎としたところが、この句の内容を一層明るくしてゐるのであります。

稽田や瘦せて慈姑の花ひとつ 子規

「稽」はヒツチと讀んで、稻刈つたあとの株から出る新芽をいふのであります。その稽の生えてゐる田をヒツヂダといふのであります。「慈姑」クワキでは澤瀉科の多年生草本でありまして、一根より叢生しまして葉は箭形をして、花は三瓣白色で高さ二三尺ばかりに伸びます。その圓い球莖を食用にしますのであります。

稲もすつかり刈られてしまつたあとに、僅に青味を保つてゐる稔の葉の、うすく／＼と戦いでゐる田に、これは又哀れといふもさらなるばかりの慈姑の花が一輪咲きのこつてゐるといふのであります。

晩秋の稔田を見渡した時、たゞ一輪可憐に咲いてゐる慈姑の花（實際は澤瀉の花であつたであらうが）を見付け出した時の作者の心は、この一點の慈姑の花の上に注ぎつくされたのであります。子規の唱導した寫生のよく行き届いた作品といふ事が出来得ます。

元朝や一系の天子富士の山 鳴雪

「元朝」は元日の朝であります。

一年の内で元日の朝ほど神々しく思はれる時はありません。さうした神々しい心持ちから、我國體は上に一系の天子を戴き、又比類のない富士の山を存してゐるといふのであります。

宗鑑は「元日の見るものにせん不二の山」と吟じ、守武は「元朝や神代のことと思はるゝ」と詠んでをります。これはいづれも元朝の崇高な念から出たものでありまして、更に「一系の天子」と我國體の上を詠じてゐるのは、如何にこの作者が忠君愛國の眞念が深かつたかといふことをも窺ひ知らるのであります。

この道の富士になりゆく芒かな 碧梧桐

「芒」は「薄」でス、キと読み尾花のことでありまして、秋の七草の一つであります。

現在自分の歩いてゐる芒の中の道と、富士山までは餘程の距離があるのでありまして、いつになつたらば富士の頂へ着く事が出来るのか、頗る心もとない事でありまして、しかしながら、かうして一步一步と先へ歩いて行くうちには、いつかは富士の頂に着く事が出来るだらうといふのであります。

裾野のきはめて長く、しらすく／＼に上りとなつて行く富士の道を歩いた事のある経験から、「富士になりゆく」といつて、次第々々に富士山に上つて行く心持ちを「なりゆく」といふ、きはめて巧妙なる言葉で云ひ盡して、さうして富士の雄大さをあらはしてゐる點が、この句の生命とも云ふべきものであります。

遠山に日のあたりたる枯野かな 虚子

「遠山」は遠く見ゆる山の意、「枯野」は草の枯れてしまつた冬の野原であります。

見渡すかぎりひろくとした枯野原であります。さうして僅に遠い山に日があたつてゐるといふのであります。

この句は朝の光景とも見られますし、又夕暮れの光景とも見られます。即ち遠山に朝日があつた場合と、既に落ちた夕日が遠山だけにあたつてゐるといふ場合、この二者以外にも、一天を覆うた雲間から洩るゝ日ざしが遠山だけにあたつてゐるといふ、晝間の光景とも見られなくはないと思ひます。

そのいづれでも遠山だけに日のあつた、あといちめんにかげつてゐる枯野のさびしさを現はさうとして居るのであります。

夕紅葉 湖水をわたる小舟かな 格 堂

「夕紅葉」は夕日のさしわたつた紅葉をいふのであります。

岸々の紅葉に夕日がさし渡つて一際美しく見え、その中の湖を一艘の小舟が渡りつゝあるのであります。

日光の中禪寺湖か箱根の蘆の湖のやうなところ、さうして夕方になつて一時に風ぎてしまつた湖上の静かさを、櫓の音を四方に響かせて漕いでくる小舟、その小舟や水面をつゝんで燦爛として夕日にかゝやいてゐる紅葉、さうした繪のやうな美しい光景であります。

馬 乗 せ て 船 渡 す な り 枯 柳 四 方 太

「枯柳」は柳の葉の悉く散りつきてしまつたもので冬季のものであります。

渡し場近くにある柳はもう一葉も見えない程枯れてしまひ、舟の客に交つて馬が一匹乗せられて、今岸を出離れやうとしてゐるところであります。

柳の枯るゝ頃の寂れた舟着場の光景で、たつた一軒きりの煮賣屋が燗酒でも鬻いでゐるやうな水涸時の感じであります。

燈 籠 や 愁 を 語 る 酒 の 上 青 々

「燈籠」は盆の時用ふる盆燈籠の事でありまして、その形は種々ありますが、この場合切子燈籠などゝ見た方がよいと思ひます。

燈籠を亡き人のためにつるし、やがて燈をともし、そのもとで夕餉の膳についたのであります。酒がまはつてくるにつれて、しみじみと亡き人のことが思ひ出されて、いろ／＼と在りし日の事共を物語つてをるのであります。

亡き人は父母か妻子か判然といたしません、先づ子供など、見るのが面白いやうであります。膳を中にした夫婦が、酒の酔が廻るにつけて思ひ出さるゝ亡き兒の事のうへを物語つてをるので、薄暗い燈籠の明りのもとの、大工の棟梁でもあらう家庭が目に見えるやうであります。

ありたけの絲のばしたり 風 露 月

「風」はタコでありましてこの場合イカ、ホリと讀むのであります。

子供の風揚げの光景でありまして、風の具合も風の程度も上々吉であります。さうして梓にあらだけの絲を伸し切つてしまつたといふのであります。

簡單ではありますが、この簡單なところに風を弄ぶ子供の心理状態、亦早春の天の晴朗として晴れ渡つてゐるところなども窺はれて面白いと思ひます。

三尺の桐の廣葉も 秋近し 六花

「秋近し」は秋隣とも云ひまして、土用頃になると何んとなく朝夕秋の近くなつたことを覺ゆることをいふのであります。

桐の苗が育つてゆく時は、葉が殊に大きいものでありまして、その廣い葉を見ても秋は既に近きにあるといふのであります。

夏中を一ぱいに擴がつた逞しい桐苗の葉が、秋近い風にふかれてしろがね色をした葉裏をかへしてゐるのを眺めて、もう暑さも追々衰へるであらう、また寂しい秋が来るなあと作者自身の心持が秋の來るのを待つてゐるありさまであります。

山道に 繭 見る 柴 や 青嵐 八重櫻

「青嵐」は夏日青天に吹く風を云ひます。「繭」はこの場合蠶の繭でなく天蠶の繭であります。山越えの道の狭ばまる程若葉した柴に、吹きつけてくる青嵐の聲をき、つゝ上つて行くと、風のために裏がへる柴の枝に、黄緑色をした山繭を見つけ出したのであります。

「藪見る柴や」と置いて、山藪だといふことを判然とせしめてゐる用意周到さ、「青嵐」と据ゑて一層確實性を深めた點、まことに緊密な手法でありまして、全面縁で包まれたやうな句境であります。

大阪の落城を鳴く蛙かな 乙字

「大阪の落城」は冬の陣の事であります。又鳴いてゐる蛙は春季であります。

大阪の城あとの見ゆるやうな田で鳴いてゐる蛙、或はその他の場所でもよろしい。無心に鳴いてゐる蛙の聲をきいて、この蛙はさながら大阪の城の落ちた昔の事を、悲しんででもゐるかのやうに鳴いてゐるのであるといつたのであります。

春が来れば必ず鳴くといふ、天然自然の現象の一つである蛙の悠久感によつて、榮華の夢一朝にして破れてしまつた大阪落城の昔の、あまりにも慌しい人事興廢のあはれさを詠じた句でありまして、現在の上によく歴史を蘇らせたところの作品と云へませう。

みづうみの底よりたてり秋の山 癖三醉

みづうみの岸からすつきりとして峙つてゐる秋の山を詠じたのであります。

山中の湖でありまして、澄み切つた水、澄み切つた空、その岸から直線的に聳えてゐる秋の山、それを「岸よりたてり」とせず「底よりたてり」と直感したのであります。そこがこの句の全生命でありまして、見たまゝの「岸よりたてり」としたのは平凡であり常識的なものになつてしまひますが、「底よりたてり」といふ鋭い感覺の働きが、散文と詩との區別する原因を作つてゐるものでありまして、これによりまして澄明な秋の山中湖の趣を僅に十七文字で以て遺憾なくあらはしてをるのであります。

覺め難き人夕風の晝寝かな 櫻碗子

「晝寝」は夏日晝間長く夜間短き時、食後の少時を寝ることをいふのでありまして、午睡、三尺寝なども云ひまして、三尺寝は日のかげの三尺ゐざる間を寝るといふ意味であります。

晝寝をしてゐる人が四時すぎになつてもまだ目が覺めず、そろ／＼夕風が吹く頃になつたといふのであります。

眞に暑い日で夜來の寢不足が祟つてか今日はいつにない長い晝寝であつて、三度起して見たが

いつかな起きやうともしない、「仕方がないからそのままにしておくと遂々夕方になつてしまつて、庭先の畑に作られた黍の葉をふく夕風が家の中まで涼しくしてくる、それに寝返りをうちながらなほも寝つゞけてゐるといふ句境であります。これは芭蕉の句の「ひや／＼と壁をふまへて晝寝かな」などに比べて見ますと、かなり複雑な内容をもつてゐることがよく判るのであります。

桔梗や女は弟子に許されず 烏不關

「桔梗」はキキヤツで、こゝではキチコウと読み、秋の七草の一つであります。

女は佛弟子には許されないといふ佛法の掟おきてでありまして、その山の麓の野に咲いてゐる桔梗の花を詠じたのであります。

句の表面にあらはれてゐる筋はこれだけでありますが、一本の桔梗の花の姿から、世をはかんで佛門に歸依しやとする女性を聯想し、それから佛法の修業場のきびしい掟おきての設けられてある山に思ひいたり、その掟の一つである「女は弟子とすべからず」といふ一つを擱んで來たものでありまして、高野山とか比叡山とかいふ事實上の確證と、さうした山を背景としての幾多の歴史

上の興味を餘情とした句でありまして、一茶の句の「きり／＼しやんとして咲く桔梗かな」の如く、桔梗そのものだけを寫生した句とは、可なり相距つた句風であることを窺知することが出来ませう。

夏草に這ひあがりたる捨蠶かな 鬼城

「夏草」は夏茂つた草をいひ、「捨蠶」はステゴと読んで蠶の病氣に罹つたために捨てられたのであります。

蠶が若し病氣に罹りますと、他の蠶に傳染する恐れがありますので、すぐ撰り出されて捨てられるのが常であります。その捨てられた蠶が、夏草の葉さきへ這ひ上つたといふのであります。

この作者は極端な聾者であるがために、當時生活権限に恵まれてをりませんでした。さうして殆ど孤獨に近いやうな環境であつたために、作者の眼に映じて詠ぜらるゝところの作品も亦、おのづから作者自身の境涯の反影となつてあらはれたのであります。夏草にからうじて這ひ上つた捨蠶の姿が、作者自身の姿でもあつたのでありまして、茲にこの句の尊さがある譯けであります。



「初雷」は今年になつて初めて鳴る雷鳴でありまして、春季にあるを常といたします。「奥の櫻」は吉野の口千本中千本奥千本と俗にいふ、奥の千本の櫻の事であります。

奥の花はまだ三分咲きであります、その花の上あたりで初雷がとどろくと鳴るといふのであります。

口千本の花はさがりが過ぎ、中の千本の花見頃でありまして、吉野は今人の出さかりであります。その人出さかりを避けるやうにして奥の櫻を見に來ますとさすがに茲は山奥だけあつてうすら寒さをさへ覚え、花が三分しか咲いてゐないのも道理である。とこんなことを考へながら逍遙してをりますと、初雷が鳴り出したのであります。

「初雷」といふのに對して「花三分」と置いたのは對照的效果を見逃すことの出來ない作品であります。

### 大正昭和時代（味ひ方の五）

鴨のそれきり鳴かず雪の暮

亞浪

「鴨」はヒヨドリと讀み形ツグミに似て全身青灰色をした鳥でビイ／＼と鋭い聲で鳴くのであります。「雪の暮」は雪の降る日の暮れ方であります。

山中の旅籠にでも泊つた時でありませう、障子の外に峙つた雪の山は音もなく靜かに暮れかゝつて、鴨が二聲三聲鳴いて山から山へ渡つて行つた、とそれからはもとの寂寞にかへつて、たゞしん／＼と暮れて行くのみであります。

雪の山國の旅舎に客となつた作者の、しみ／＼した心境がよくあらはれてをると思ひます。

結界の外に鳥鳴く一夏かな

三幹竹

「結界」はケツカイと讀む佛語でありまして、佛法に法を以て界ひを結び、道外や魔物を防い

で入らしめないことをいふのであります。又「一夏」はイチゲと読み、佛者の陰曆四月十六日より七月十五日迄九十日間、一室内に禁足して精進潔齋し、讀經などして暮すを安居といふのであります。一夏は安居の行はるゝ間をいふのであります。

山中の寺で安居の修業をしてゐると、結界の外とおもふあたりで鳥の鳴く聲が聞ゆるといふのであります。

結界といつても法で作られた界でありますから、別に垣のやうな堺があるわけではありません。假りに現實化して云ひますれば、淨境といふ程の意でありまして、俗人がその内に入りますと、心神おのづらにしてあらたまるといふやうなところをいふのであります。さうした結界の外林中で幽鳥が鳴いてをるのであります。ごく深山の中の安居修業の趣きであります。調子の張り切つた作品といへようと思ひます。

桑の葉の照るに堪えゆく歸省かな

秋櫻子

「歸省」は暑中休暇を利用して郷里へ歸ることをいふのであります。

汽車又は船から降りて自分の家まではまだかなり道程があります。そよとだにもしない無風の

白日の下を、日に照りつけられてじつと動かない桑の葉が、兩側からさし出て狭められた中の道を、暑さに堪えつゝ我家へと歸省してゆくありさまであります。

何物をも見る事の出来ない桑畑の中の道を、たゞひたすら我家へ歸りつき度い心持ちで歩みをつゞけてゐる有様がよく現はれてゐるのであります。

旅よりも里はしづかに畑打てる

枯木

この句は「歸庵」といふ前書があります。「畑打」は春も秋も冬もやりますが、主として春多くやりますから春季となつてあります。

數日間旅に出てゐて山里の家に歸つて見ると、數日ではあつたが旅は慌しかつた、句作生活をしてゐるものにとつては、旅はこよなきものと思つて居たが、さて里へ歸つて見ると旅よりも一層閑かであつて、さうして里人は畑打ちをしてゐるといふのであります。

旅から戻つて家に歸りついた安心と、里人の打つ鎌の音や話聲をきいてゐる靜かな山居のありさまが、非常によく出てをりまして、單なる寫生句の遠く追従を許さぬものがあります。

「近江路」は近江國の道のことです。「湖」はこゝではウミと読み、「花菜畑」は油菜の花の咲いてゐる畑のことです。菜の花がどこまでも咲きつゞいてゐる中を、湖に沿うてどこまでもつゞいてゐる近江路は、湖より低いかと思はれるほど平坦であるといふのであります。湖より低い道であつたらば湖の水に浸つてしまふではないか？ といふ疑問が假りに抱かれたとするならば、それはこの句を理窟で解剖しやうとするからであります。俳句否すべての藝術は、理窟では解される事が出来ないものであります。作者が湖より花菜畑の方が低いと見たのであります。それによつて「近江路や」とうけた感じがあらはれ、ばよいのであります。

杉林春の日影をつくりけり

白水郎

杉林があらまして、春の日が冷くさし渡り、それがために杉の木は影をつくつてをるのであります。

一讀どこに面白味があるかと思はれる句であります。これを徐ろに味つてをりますと味へば

味はふ程味が出てくるのであります。野中にたゞ杉林があつて、それに春日がさした静かな趣、そこにこの句の生命があるのであります。夏や秋や冬の日さしではこの味があらはれません。何等巧ます作らず、見たまゝ感じたまゝをありのまゝ詠じてある純情が、いかにも素直にあらはれてゐるのであります。

雷魚や大根つけし宵肴竹石

「雷魚」はハタハタと読みまして、硬鱗類の七八寸ばかりの魚でありまして、背部が淡褐色で銀色を帯び、側線下に濃褐色の條線がありまして、東北地方や北陸地方で漁れる魚で、雪おこしの雷が鳴ると、この魚が水面に浮び出るのでカミナリウヲともいはれるのであります。

大根を漬けて一安堵した夕餉の淺酌に、雷魚を買はせて下物にしたといふのであります。

一冬をこもる雪國で、大根を漬けることは一日の大仕事であります。朝からかゝつて夕方漸く終り、これで年内の仕事も大半片附いたといふ安堵から、其夜久しぶりで雷魚鍋でもつゞいての晩酌に、一家團欒の心祝をしてゐるありさま、如何にも東北の質朴な趣がこの句を通して躍如としてをるのであります。

ふるさとに旅籠住ひや蜆汁

橙黄子

「旅籠」はハタゴと読み、「蜆汁」は蜆貝を實に入れた味噌汁であります。生れ故郷に来て旅籠住ひをせねばならぬ作者が、偶々朝餉の膳に蜆汁が運ばれて来たをりふしの吟詠であります。

展墓か又は邸宅のあと仕末か何かに故郷へ来ましたのですが、殆ど身寄がなくなつてしまつたので、よんどころなく旅籠住ひをせねばなりません。永い間他國へ出てゐたためにその間に先輩は物古してしまひ友人も殆ど無くなつてしまつたが、變らぬものは少年時代に遊んだ野山で、今更のやうに「國亡びて山河あり」といつたことも思ひ出されてくるのであります。さうした懐かしさが、朝餉の膳に運ばれた蜆汁によつて、機縁が熟してこの句になつたものでありませう。

年の瀬の往來にまじる夜番かな

圭岳

「年の瀬」は年の暮のことで、「夜番」は冬季の火の用心に橋をうちながら町を巡廻してありくものをいひます。

年の瀬の町は夜遅くまで往來は絶えないのであります。その往來に交つて、火の番が橋を打ち鳴らしながら歩いてゐるといふのであります。

もうあと一日か二日で今年の無くなるといふところから、往來の人は忙しさうにしてをります。その中に夜番だけは、年の瀬も正月も無いといつたやうな顔をして歩いて居るのであります。明るい町の燈かけの中を、燈のついた提燈を腰にした夜番の姿が眼に見ゆるやうであります。

流水や宗谷の門波荒れやます

誓子

「流水」はリユウヒヤウと読んで、寒地の海が氷つて、それが春になつて解けて流るゝをいひます。「門波」はトナミと読むのであります。

流水が流るゝ頃は、宗谷海峡の門の波が荒れてやむことがないといふのであります。

流水は時に山のやうな大きいものを見る事がありまして、さうした流水がつぎ／＼に流れてくる光景は、北海に住む者ならでは知ることの出来ないところで、その流水と流水とが流れあつたの響、たちさわぐ波音など北海の壯觀が、「荒れやます」と置かれた下五文字のもつ効果によ

つてよくあらはれてをります。

繼ぎあはす筏に春の水廣し 茶山

「筏」はイカダと讀み材木を藤蔓でつらねて川を流してゆくもの、「春の水」は春季の水であつて、概ね波音なく平らかであります。

一つの筏を二つか三つに繼ぎあはせてをりまして、そのあたりは春水が満ち渡つてをるといふのであります。

山奥の御料林で冬期伐り出した材木をだん／＼川下へと流して來ますと、今度は筏に組んでそれに乗つて流して來ます。さうして峽を出ていよ／＼これから平野となつて川の幅が廣くなると、更に二つも三つも繼ぎ合せて長い筏にして流して行くのでありますが、この句はその筏の繼合せ作業をやつてをるところであります、天龍川か木曾川のやうなところで、筏師の旅はこれから長閑になつてゆくのであります。

揚船はいつものさまに夕霞 月波

「揚船」は砂濱又は岸邊などに引あげてある船の事、「夕霞」は夕方の霞をいひ春の夕の大氣のどんよりモヤのかゝつたやうな現象をいふのであります。

今日も亦海邊に出て見ると、砂の上に揚げてある漁船がいつものやうに横はつてゐて、さうして見渡すかぎりの夕霞がたちこめてゐるといふのであります。

毎日々々夕方になると散歩がてら海邊に出て見る、きのふもあの邊に漁船が引きあげられてあつたが、今日もきのふと同じ場所に横つてゐる。それは別に珍らしい事ではないが、毎日々々同じやうな事が繰りかへされてある事も、考へて見れば珍らしいといへば珍らしいと思へる。その影が夕ぐれの霞の中に包まれて、どんより暮れてゆく趣はまた捨てがたいものである。——かういつたのであります。

何んでもないところを、何んでもなく感ずるのが詩人の感覺でありまして、そこに教へらるゝ大きなものをこの句はもつてをるのであります。

寒菊や宵寝さめたる老二人 草城

「寒菊」は冬季咲く菊の一種で、花も葉も普通の菊より小さく、活花専用に栽培せらるゝを常

とします。「老二人」は老人二人のことで、この場合老夫婦と見るべきでありませう。

宵寝をした老の夫婦が夜半に眼がさめて物語りをしてをります、その床の間か柱の懸花活かに寒菊が活けてあるといふのであります。

老人の眼は覺め易いものでありまして、それが宵から寝たので一層早く眼がさめてしまひ、つれづれのまゝ起き出て茶でも入れて飲みながら話をしてゐる老夫婦の物靜かな部屋のありさまで、「寒菊や」と置かれたのも冬の夜の光景をあらはすに効果あるものであります。品のいゝ老夫婦の生活が想像されるのであります。

眼界の國原晴れぬスキー乗 青陽

「眼界」は眼に見ゆる限りのことであり、「國原」は國をその廣きに就いていふ語、「スキー乗」はスキーに乗つて遊んでゐる自分を云ひます。

高い所から低いところを眼ざして、スキーに乗りながら<sup>すべ</sup>つてくる眼の下に、見ゆる限り國原が晴れ渡つてゐるといふのであります。

思ふだに壯快な句であります。視野の限り銀盤をのべた中を一目散に迅走するスキー上の吟詠

で、見たまゝ感じたまゝを直截に一句にしてある點、これがこの句の明快な内容を作つてをるのであります。

峡中の難乗りきつてビールかな 茂竹

「峡中」は峡谷の中のこと「難」は峡谷中にある難所のことをいふのであります。「ビール」は夏多く飲用されるといふ點から夏季としてあります。

峡中を流るゝ川を船で乗つて下るのであります、その峡中でも難所とせられる荒瀬も無事に乗り過ぎて來た一行が、一旗亭に上つて食事をしてゐる光景で、その食事の前にビールが抜かれたのであります。

保津か天龍か木曾か、さうした川を船で下る快味は、秋よりも春よりも、山風薫り岩間に杜鵑花の咲く夏をよしとしなければなりません。その川下りの壯舉も無事に済んで、一同樓の一間を占めて浴衣に着替へ、ビールをぬきながら喝を醫やしてをるところであります、危険であつた難所の事や、美しかつた河鹿の聲の事など、それからそれとつき／＼と談の盡きないありさまであります。

「峡中の難乗りきつて」と一氣に詠ぜられ、さうして「ビールかな」と置いただけで、十分に光景のうけとれる省略を用ひた句法は、短詩形である俳句の長所を最も多くとり入れたものと云はねばなりません。

鎌傷に案山子の袖をちぎりけり

祥石

「鎌傷」は鎌であやまつた傷であります。「案山子」はカカシと読んで、秋の稲田に立てられた人の形に作つた鳥威とりおどししであります。

稻刈りをしてゐてあやまつて鎌で指を傷つけたのであります。田圃の中の事とて結へるに何んにもありませんので、案山子に著せてある古衣の袖をちぎつて結へやうとしたのであります。

何等の紛飾なき實感句でありまして、著飾つたアソビの多い現代の俳句の中に、かうした尊い作品を見出すことは眞に頭がさがるのであります。

境涯から出た血を吐くやうな作品でありまして、作者が藝術によつて生活力を落さぬ信仰をも、この句を通じて察し得らるゝのであります。

桶の中の豆腐しづけし火事明り

巴石

「火事」は冬に入つて多くありますので冬季としてあります。豆腐を沈めてある水桶に火事のために焦げた天の明りが映つてゐるのであります。

火事といふ動的なものに對して、桶の中の豆腐といふ靜的なものを配した作品で、靜動の間に生ずる俳句の境地をきはめてよくあらはしてをるのであります。

投げ挿しに青き穂麥や更衣

天浪

「投げ挿し」は花を投挿しにすること、「更衣」はコロモガへこゝろもがへと読んで陰曆四月一日に綿入れから袷あじに著かへることをいふのであります。

床か又は懸花活かに、投げさしに活けられてある二三穂の麥があり、その部屋で冬からつづいて着て來た衣を袷あじに着替えたといふのであります。

赤だの黄だのといふ花でなく、青々とした見るからにすがしい麥の穂を活けた部屋、そこで袷あじに衣更へしたさつぱりした心持をあらはしたのであります。この場合「投げさしに」も非常に

よく働いた言葉であると思ひます。

笹鳴きや土の戀ひしき病日記

薫風子

「笹鳴」は冬季の鶯の子の鳴き習ひでありまして小々鳴きの義、「病日記」は病床日記の事でありませう。

病床近くの庭の垣に来て、鶯の子がチャツ／＼と鳴いてをります。恰度それは、早く癒つて土を踏んで見度いものだ——等といふ意味の事を病床日記に記した折からであつたといふのであります。土が戀しいといふのですから、病氣も相當に長い事が知られます。さうして何んとなく忙しさを感じさせるやうな、春の待たれるやうな病人の心境も伺はれ、不即不離の間の妙味が受けとれるのであります。

雷風雨の中に傘向き定まらず

芒角星

「雷風雨」はライフ、ウ、と讀んで、夏雷鳴と共に降つて来る雨風であります。

雷鳴を交じへた風雨の中を、傘をさして歩いて来ると、風が前から来たり横から来たりして、

さしてゐる傘をどう持つていゝか判らないといふのであります。

雷鳴の恐怖と、吹降る風雨の定まらないために歩行の困難さが、さながらに現れてをるのであります。何等の奇を衒ふこともなく、ありのままを叙した作品であります。かうした體驗は何人でも持つてをるのでありますが、それを云ひあらはすことは、その人の句作技倆の如何によるものといへませう。

冷々と月の影ある青柚かな

梅屋

「冷々と」はヒヤ、ヒヤトと讀み「青柚」はアヲ、ユと讀むのでありまして、柚子の成熟しないものであります。

暗い葉の繁みの中に、ひそやかに生つてをります青柚に、雨後でもありませう月影が、ひや／＼として照らしてをるといふのであります。

如何にも觀察の行届いた、さうしてかなり感覺も鋭鑄に事物を掴み得てあるのであります。味つてゐるとどこともなく、にほひが高く感ぜられるのであります。地蟲がしづかに鳴き初める頃ほひの夕月夜の趣がよくあらはれてをるのであります。



坊々に薪くばる馬や神無月 沽井

「坊」は寺院のことでありまして「神無月」は陰曆十月の和名であります。この月は諸國の神社の神様が出雲の大社に集り給ふといふ傳説から、出雲國以外の國ではカンナヅキといふのであります。

十一月に入るといづこの家でもそろ／＼冬仕度をはじめるのでありますが、わけても山中にあるやうな寺では、寒さが早いので冬の構を早くするのであります。一冬の爐や竈に焚くだけの薪を注文しておく、その薪を積んだ馬が、何々坊、何々院へと配り運んで行くのであります。

氣の早い杵や柄はもうそろ／＼落葉をしはじめ奥では既に雪が來たといふ。登山道の茶屋も大方は鎖してしまつたが、一二軒残楓を見にくる客を目あてに霽いでゐるのが残つてゐる。その茶屋の前に薪馬を繋ぎながら、「この薪は何々坊様のかい。——」「ウンニヤ何々院様のだ。——」等と茶屋の婆さんと馬子が、熱い茶を飲みながら話をしてゐる光景が眼に浮かぶのであります。

硫氣ふゝむ風をつめたし青薄 草雨

「硫氣」はリウキと読みます。「硫」はユノハナでありまして、硫黄氣の事であります。「青薄」アヲス、キと読み、穂の出ない前の青々した薄をいふのであります。

温泉がふき出るために、青薄と岩石の外何物をも見る事の出來ないやうな焼地でありまして、さうした谷をはるかに下に眺められる徑を歩いてゐると、硫黄氣をふくんだ一種のつめたい風が吹き上げてくるといふのであります。青薄と硫黄臭いつめたい風と取合せ鹽梅は、絶對的に動かすべからざる境地でありまして、これは實感から詩化への成熟と、その機縁に時を得たもので、然も豊かなる普遍性を具へてゐるが故に、完全に近い藝術といへませう。さうしてこれはこの作者によつて創造された、唯一つあるのみの句境であるといふことが出来るのであります。

笕落つる水や浮沈す冷し瓜 牧童

「笕」はカケヒと読んで主として山から水を引いて來る竹樋をいひ、「冷し瓜」は生食する瓜を冷してあるのであります。

高いところから笕の水が落ちてをりまして、その水溜めにしてある桶の中に冷してある瓜が、落ちてくる水壓のために沈んだり浮んだりしてゐるといふのであります。

冷し瓜の句はすいぶんたくさんあります。「人來たら蛙になれよ冷し瓜」「茶」「冷し瓜夢見て  
長き晝寝かな―師竹」「瓜冷す山の浅井や葛の花―小帖」「冷し瓜月にあげくる笥かな―冬葉」な  
どがそれでありまして、この外にもまだたくさんある事でありませうが、これらの句がいづれも  
冷し瓜を詠じながら、各々趣を變へてゐるところに、各々の句の獨立性があると同じやうに、笥  
の水の落つる下にあつて浮いたり沈んだりする瓜の面白さに興を得て出來たところに、この句も  
亦独自の妙味があるのであります。

ふるさとの波路に秋の入日かな

默興

前書に「船中」とあります。山陰道伯耆の海岸に故郷をもつ作者が、久しぶりでふるさとへ來  
ることは、誰でも懐しい事であります。その懐かしさを胸に秘めながら甲板に出て見渡すと、秋  
の日はあかくとして、波に落ちかゝつてをるのであります。一讀得も云はれぬ妙境に入つて  
をる作品といふ事が出來ます。これがもし「春の入日」「夏の入日」「冬の入日」では到底この味  
は出ぬものであります。「秋の入日」と置いたところに動かすことの出來なものを擱んでをるの  
であります。

## 季語と季感

### 古代歌謠にあらはれたる叙景詞

俳句とその他の詩歌とを比較しまして、最も異つてをります點は、俳句には必ず四季を通じて  
の季節をあらはす語又は感じが詠み込まれてあること、さうして又「や」とか「かな」とか「け  
り」といふ語が多く使用してあるといふ、この二つの點であります。その季をあらはす語又は感  
じが詠みこまれてある理由に就いてこれから申し述べませう。

叙情を主とする和歌から別れて獨立した俳句は、その形式の短小なるよりして、必然的に叙景  
を主とし發達してここに俳句といふ名稱をもつに至る分野を作り出したのであります。

景色を詠ずるといふことに俳句の本分があるやうになつたことは、俳句の形式が非常に短いといふ理由もその一つであります。それよりも我國本土の天然自然にともなふ現象が、しかくあらしめるに至つたものと考へるべきでありまして、従つて俳句の無かつた時代に於きましても詩歌その他にあらはれた叙景詞を見まするに、俳句に類似したものをたくさん見る事が出来るのであります。その一二を掲げますれば、古代歌謡の「神樂歌」に

笹の葉に。雪降りつもる冬の夜に。(下略)

さざなみや。志賀の辛崎や。御稻搗く。(下略)

又「催馬樂」に

庭におふる。から薺は。よき菜なり。(下略)

うぐひすの。縫ふといふ笠は。梅の花笠や。

更に「風俗」を見ますれば

大鳥の。羽根に。霜降り。

かの行くは。雁か鶴か。雁ならば。

「今様」にも

稻舟のわづらふは。最上川の早き瀬。

この外和漢朗詠集を見ましても新撰詠集を見ましても同様、又宴曲などに至りますと景色を叙した詞は立派な格調をなしてあらはれてをりますし、「延年唱歌」中に

霜こぼる袖にもかけはのこりけり。

露よりなれしありあけの月。

といふのが見えるのであります。以上の如く、既にして古代歌謡中に多くの景を叙したところの詞が見え、その外和歌で最も古い歴史をもつ、「萬葉集」などを見れば明白に判るのであります。これらは既に何人も知るところでありまして、一々こゝに例を擧ぐるまでもないことと思ひます。

斯様にしまして俳句の存在以前、又はその他に於きましても、天然自然を詠ずるといふことは、その程度と發達との問題だけで、立派に文獻にあらはれてをるのであります。それが和歌から俳句の分離となつて、そこにはじめて景色を叙することを専門とする詩といふものが完成されたのであります。

## 氣候風土と國民性

本土、四季の氣候の變遷は頗る迅速でありまして、春夏秋冬と移り變つて行く時の脚が、それにつれての諸種の現象と共に、實に早く變遷して行くのであります。同じ夏でありまして、初夏と盛夏と土用との時候は著しい相違でありまして、従つて本土の暑さの酷しさは、臺灣や印度の暑さとは、その質に於いて相異してをるのであります。また冬の寒中でありまして、寒さに馴れてしまつた北海道や、樺太のそれとは大いに異つてをりまして、中冬を後にし早春を前にしたところの、僅かの間の極寒中が、それを感じる我々には、強く大きく響く酷寒なのであります。さうした意味の氣候の變化は、直ちに衣食住の上に影響を濃くしてゐるのであります。従つて春夏秋冬につれて、衣服を何種となく着替えねば堪へられないといふのが、我國本土の氣候なのであります。

さうした變化に富んだ氣候の中に育まれた國民性として、先天的な氣候の變化、又は氣候の變化による自然現象やそれに深い關係ある人事現象に對して、特別の親しみを有つてをるのであり

ます。即ちそのあらはれとしまして、食物の料理が、四季その時のものを珍で、ある點、衣服の模様として織つたり染めたりされたものが花鳥を主とし、花かるたが十二月の花鳥によつて分けられてあり、食べ物の名を、あられ酒、紅梅焼などに因み、又豆腐のから、を卵の花といひ、猪肉を牡丹といふなど、更に紫式部著の源氏物語の各項の題名が、夕霧、權、螢火、帚木、など、自然物に名を借り、或は戰場で用ふる兜や鎧などの類にいたりまして、小櫻鉞、卵の花鉞、藤の花鉞といふやうな、その趣を自然現象に選んだ模様を以つて裝飾されてありまして、如何なる限々にまでも自然愛好の念があらはれてをるのであります。以上はほんの片鱗に觸れたにすぎませぬけれ共、我國民性と自然とが如何に深い關係におかれてあるかといふ事が判るのであります。實に東洋人にとつては自然は生活の酸素であるといつてもよいのであります。

## 詠歎に就いて

本土の氣候が臺灣や樺太などに比較して非常に順調であるといふ事は、一方からいふと變化の激しい事をいふのでありまして、その變化の激しい時の流轉は、一瞬だにも停止することなく、

流れ去り流れ来るのであります。それに對して人生は限りあるところの運命に支配されてゐるものでありますから、その限りある人生より限りない自然の流轉の相に對しての愛惜觀念から、咲く花に對して「もう今年も花が咲くやうになつた。」と驚き、散る花を見ては「もう散つてしまふのかと」歎ずるのであります。即ち

鶯のあかつき寒しきりくす  
其角  
來て見ればゆふべの櫻實になりぬ  
燕村

これらの句の如く、鶯の春であつたと思ふうちに、もはやきりくすの鳴く秋になつてしまつたと歎じ、この櫻は朝はまだ咲いてゐたのであつたが、夕方來て見ればもう實になつて居たといふ驚きでありまして、いづれも四時の遷り變りの早いのに驚いたところの詠歎であります。古い言葉借りて云へば「落花流水にとどまらず」等も詠歎をいうたものであります。

四季の變化につれて諸現象を詠歎するところに俳句の發生があるのであります。然らば詩や歌などさうでないかといへば詩でも歌でも同様四季の變化を詠歎する場合もありますが、その本領としては詩や歌は自然を詠ずることが俳句程に適しないのであります。云ひかへれば俳句は叙

景を詠ずる事には適してゐる詩形であるが、叙情を述べることに於いて詩や歌ほどに適してゐない詩形であるといふことになるのであります。

隣室に子等のもの讀む聲きけば心にしみて生きたかりけり 赤彦

病中吟であるこの歌は、これは絶対に歌獨特の内容であります。しかし

くれなるの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降る 子規

この歌になると、「くれなるの二尺のびたる」が薔薇の芽の説明でありますので、俳句の如き形式の短小であるものは、必然的に冗漫になり易い説明語を省くのをその句法の常としますから

薔薇の芽の針くれなるに春の雨

とかういふ俳句の形としても、この歌のもつ叙景は足りるものであります。

いつしかに春も名残りとなりけり昆布干場のたんぼの花 白秋

この歌にしてもこの叙景をあらはすだけなれば

蒲公英や昆布干場の砂の原

かうすればいゝのであります。たゞ、この白秋の歌は子規の歌より「いつしかに春も名残り

となりけり」といふ叙情を豊に含んでをりますだけ、歌として勝れてもをり、又それによる音律美を感じる事が出来ますので、歌でなければならぬ内容ではありませんが、假りにこの歌が叙景の個所だけで終始してゐるものであるとすれば、俳句にその境地を譲つた方がいゝのであります。

大津繪に焚おとしゆく燕かな 燕村

この句に於けるごとき、大津繪といふ特種な簡略畫と、燕といふ敏捷な動物とのその輕妙なコントラストだけで、大津繪を賣つてゐる店のありさまも、大津の宿場のありさまも描かずしてあらはれるやうにした省略法は、俳句獨特のもので歌や詩の及ばないところでありませう。されば、俳句に於いては自然に對する感想が、詩や歌の場合より非常に發達してをりまして、「古今集」の「俳諧歌」を見ましても

秋霧の晴れて曇れば女郎花花の姿ぞ見え隠れする

僧正遍昭

春霞棚引く野邊の若菜にも成りて見しがな人も摘むやと

藤原興風

これらの如く「秋霧」「春霞」などありますが、俳句の方では霞といへば春、霧といへば秋と

直感し、歌の方で椿は雜の部に入れてあるのを俳句では「椿かな」だけで花の咲いてゐる椿を感じ、さうしてそれは直ちに春だとされてある如く、悉く四季の變遷に由る感想は、俳句に於いて著しい發達と進歩を遂げてをるのであります。

四季の自然現象のあらゆるものに詠歎のある事は勿論であります。自然と密接なる關係を有つところの人事現象に於きましても同様であります。今その例をあげて見ますれば

夏草やつはものどもが夢の跡 芭蕉  
躑躅野やあらぬところに麥島 燕村

これらの句で見る如く、第一句は奥の細道の旅の吟で、陸中國平泉での作であります。

「衣川は和泉が城を廻りて高館の下にて大河に落ち入る。康衡等の舊跡は衣が關を隔て、南部口をさしかため夷を防ぐと見えたり。偕も義臣選つて此の城に籠り功名一時の叢となる。國破れて山河あり城春にして草青みたりと、笠打敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。」と書いてある通り、藤原三代の榮華の夢を結んだ平泉の館跡に来て、眼前に茫々として茂つてゐる夏草を見て、懷古の情堪へがたきものから誘發されて「夏草や」と詠歎に出たのであります

す。

第二句は野遊びか或は蕨折りのやうな行樂に出掛けたとき、木株や小松まじりに美しく躑躅の咲いてゐる野の中に、麥の作られてあるに、ひはり島を見付けたのであります。麥畑のある事と豫め知つてゐるのでしたらば、別に注意を惹き起しはいたしませぬが、全然豫期しない野の中に、誰が来てこんな處に麥を作つてゐるのであらうと、思はぬものを見出したのでありますから、作者にとつては頗る大きい詠歎でありまして、それ故に「あらぬところに」と出たのであります。かういふ風にして、四季の風物によりましての感動が一句を成してをりますが、この「夏草」にしましても「躑躅」にしましても、一つの季をあらはしてをります現象でありまして、それらの現象に立脚したところの「つはものども」や「あらぬところの麥島」に對する吾人の愛惜觀念から出たものであるのであります。

物の音ひとりたふるゝ案山子かな

凡 兆

淀船や炬燵の下の水の音

太 祇

この句にしましても第一句は、物の音がした、と見るとそれは田に立てられてあつた案山子が、

おのづからにして倒れたのであつたといふのでありまして、稻もすつかり刈られてしまつた跡の田の、秋の夕暮の光景が、この句を通して寂寞の極致にまで引入れるのであります。いふまでもなく「案山子」は稻につく鳥類を感すために作られた人の形をしたものであります故に、「ひとり倒るゝ」といふ擬人法を用ひまして、その表現効果を一層適切にしてをるのであります。第二句の淀船は淀川を往復してゐる船のことでありまして、冬の夜の寒い時を船中に置炬燵をしてをりますと、炬燵の下で水の音がするといふのであります、家の中にあるのが通常である炬燵が、船中にあるといふさへ既に珍らしいが上に、その下の水音を聞いた作者の詠歎が忽ちこの一句を成さしめたのであります。

これらの「案山子」といひ「炬燵」といひ、一句の中にあつて前の句の「夏草」や「躑躅」の場合と同じやうなハタラクを示してゐる現象は、天然自然の現象とは異つてをりまして、人爲的に作られた現象で、案山子や炬燵そのものに就ては直接に四時の變遷をあらはす季はありません。これ共、案山子は秋の稲田に、炬燵は冬季防寒用に、必ずその要を見るのでありますから、案山子といへば直ちに秋を感じ、炬燵といへばすぐ冬を感じる事が出来るのであります。これらは天然自然と密接なる關係を有つてをるところの、人事現象でありまして、かくの如く、天然自然な

り、又は天然自然に密接なる関係のある人事現象に相ともなへる我々の感動が、詠歎されるところに俳句の成立があるのであります。

### 自然の諸象

天然自然の現象のうちでも、季節の遷り變りをあらはすものと、又あらはしてもごくその感じが稀薄なものと、全く無いものとがあります。木の芽、櫻、椿、鶯、雲雀、の如く「春」でなければ見たり聞くことの出来ない現象と、檜、馬、牛、龜、の如き四季を通じて何等の特長を見る事の出来ないもの、即ち季節の遷り變りをあらはさないもの、又路傍の雑草の或種のもの、如く、花を開き實を結んでも、殆ど眼にとまらないやうな微かな季の遷りかはりをもつてをるもの、かういつた風に同じ現象でもさまざまあるのでありまして、それらに對していづれも高下優劣の差別のある譯ではありませぬが、路傍の名もない草や花の、人目に觸れるか觸れないやうなものよりも、椿の紅い花が咲いた事の方が、我々の注意を惹き易いことは當然な事でなければなりません。さればこそ、古來からの俳句を多く讀みましても、椿や櫻の句は多くありますが、弟

切草だとか濱帯木、雀の種など、いふ植物を詠じた句は少いのであります。

然らば俳句は椿や櫻の如き、季節の移り變りをあらはすに顯著なもののみを詠するに適してゐて、季節の移り變りとしてのあらはれの稀薄なものを詠する事は出来ないかといひますと、決してさう斷定されたものではなく、自由自在に詠じて一向さしつかへのないものでありますが、要は「椿が咲いた」といつて吾人の感情が動くと同じやうに、「弟切草の花が咲いた」ことにも感情が動いてくるかどうか問題であるのであります。弟切草の花によつて感動があれば、それを俳句に詠する事に何んの躊躇がありません。大いに詠じてよろしいのであります。

### 象徴と季感

草臥れて宿かるころや藤の花 芭蕉

この句には前書が「大和行脚のときに丹波市とかやいふところにて、日の暮れかゝりけるに、藤のおぼつかなく咲きたるを」といふ前書があります。



思ふだにもどやかな大和路の旅で、あちらの古刹こちらの名所と見物して丹波市近くへさしかゝる頃は、さしもの永い春の日も漸く暮れかゝつて、埃にまみれた草鞋もどうやら重くなるのを覺えた。どこかいゝ旅籠はたごはないであらうか、こんなに草臥れた時には、どうか氣分のいゝ旅籠に泊り度いものだ、せめて水音の美しい、山でも見えるやうなところなれば——等と考へて來ると、道ばたの古びた家の軒に年を経た藤の老木が、うすむらさきの花房を、夕風になよ／＼とさせ乍ら咲き垂れてゐるのであります。

この場合の芭蕉の心持をあらはすのには、路傍に咲いてゐるげんげや蒲公英でもありません、麥の穂や菜種の花でもありませんでした。又塀越しに見える李の花や木瓜の花でもなく、家の軒にゐた燕でも、日の暮を呼んでゐる屋根の子雀でもありませんでした。しろ／＼と暮れ残つた街道の上に、うつすりと紫を染め出した藤の花、そのなよやかな姿こそはじめ、永い春の日の旅に草臥れて、いゝ旅籠を見付けて洗足し度いものだといふ心持をあらはすに、動かすことの出來得ない對象物であつたのであります。云ひかへればその藤の花によつてその時の心持が具象化されて表現されたものであります。若しそこに藤の花がありませんでしたらば、おそらくその時の心持は永久にあらはすことが出來なかつたのであります。そしてその藤の花の咲いてゐる場所

より、以前に芭蕉が旅籠を求めて泊つたと假定し、その翌日早く藤の花を見て丹波市を出發したとすれば、一宿のために疲れも癒えてしまひ、又朝の空氣の澄んだ中の藤の花であつて見れば、全くその趣を異にしてをりますので、これも恐らく俳句に成るに至らなかつたものと思はれるのであります。

げんげ、蒲公英、麥の穂、菜の花、李の花、木瓜の花、燕、雀の子、とかういふ風にいろいろの現象がありながら、そのいづれにも感興を惹かず、藤の花によつてその時の心持があらはれたのでありますから、その場合の藤の花は他の植物と同じやうに、客觀的に見た藤の花ばかりではなく、同時に作者の感情を象徴した藤の花だといふ事が出来るのであります。繰りかへして申しますが、若し假に芭蕉が駕籠にでも乗つてこの丹波市へやつて來たとすれば、おなじ夕方の藤を見ましても、たゞ美しく咲いてゐるなあと思ふだけであります。よしんば假りに句を作つたとしても「草臥れて——」といふ心持はないのでありますから全然異つた句になるのであります。一日の旅に疲れきつた心持ちと、夕暮れの藤の花がいはゞ一枚の境に融合化されてをるのであります。この時の心持ちを充分にあらはすは、藤の花以外に何物もなく全く絶對的のものであります。

かうした作者の感情の象徴的となつて抽象され、一句に仕立てられた時「藤の花」といふ語を

正岡子規時代には「季題」といひ、後大須賀乙字によりまして「季語」と改められたのであります。さうしてその季語が一句の上にハ、タ、ライ、テをります作用を名づけて「季感」と云ふので有ます。即ち「草臥れて宿かるころや」に對して「藤の花」と置かれ、その藤の花の語が一句全部の上に光被し、統一を保つてをりますこと、その作用を季感と名づくるのであります。従つて俳句を離れては季語の意味がなくなる譯けでありまして、單に藤の花を見て美しいと感じただけでは、自然の美を意識したのみでありまして季感といふ謂はない筈であります。

父母のしきりに戀し雉の聲	芭蕉
湖の水まさりけり五月雨	去來
鶯や遠道ながら禮がへし	其角
潮の音の二三度かはる夜寒かな	浪化
静かさは栗の葉しづむ清水かな	尙白
よもすがら音なき雨や種俵	蕪村
青き葉の吹かれのこるや棉島	太祇

鰻くひし犬狂ひ臥す枯野かな	几董
一函の皿あやまつや煤拂	召波

これらの句で見ると、「雉の聲」「五月雨」「鶯」「清水」「種俵」「枯野」「煤拂」が自然現象或は人事現象でありまして、それらの現象につれて生ずる感情を主として詠じた一句の上にハ、タ、ライ、テをります語の作用は、「藤の花」の場合と同じく季感であるのであります。

かくして俳句は天然自然の現象につれて感情を詠する詩であるといふことが判るのであります。天然自然の現象の内でありましても、吾人の感情の象徴的となるだけの現象は、四時の氣候の遷り變りをあらはすだけの正しい資格を有つてゐる現象といふ事になります。氣候の變遷をあらはすに十分でない現象に對しては、感情の動きも従つて乏しい故に、それによる作品を見る事も少いといふ理由にも基くのであります。

以上で俳句といふ詩が他の詩形と異つて、四時の變遷をあらはす現象を詠するもの、従つて一句中には必ず季をあらはす感じが含まれてくるべきもの、さうしなければ成立し難き詩形であることがほゞ了解された事と思ひます。

## 主観と客観

俳句は天然自然の現象によつて起つてくるところの感情を、最も端的に詠するものであります。故に、感情そのものは直接にあらはれず、対象に假托かたくされて現はれるが如き状態にあるのであります。云ひかへれば、感情の力をもつて自然を抽象ちゆうしやうして詠歎するのでありますから、詠ぜられた一句全體が感情そのものであるともいへるのであります。前にも述べましたやうに、自然現象の内でも四時の氣候の遷り變りをあらはすに、その程度に種々の相異がありました、又作者自身の其時と場合の心境の變化によつて、同じ現象であつても強くも響き弱くも感ぜらるゝのであります。大體に於いては主観的と客観的の二つに區別されてあるのであります。

皿をふむ鼠の音の寒さかな 蕪村  
時鳥大竹藪をものる月夜 芭蕉

第一の句は厨くりやに置いてある皿を踏む鼠の音の、僅にカチといふ音を聞いた寒い夜をあらはした

ものであります。一ヶ所を深く掘りさげたところの主観のすぐれた作品であります。第二句は雨後の大竹藪に幽かに月影が漏れてくる夜を、時鳥が鳴いたといふ嵯峨での吟であります。これは客観的であるといふ事が出来ます。寒いといふ感じを強くあらはす爲めにおのづから主観的になり、時鳥の鳴く大竹藪の月夜を叙するに客観的手段が撰ばれてあります。そのいづれにしましても自己の感情を露骨にあらはしてはをらないのであります。「皿を踏む鼠の音の」といふ風ふうにあくまで景を叙して來てをるのであります。

主観的俳句を擧げて見ますれば

名月や池をめぐりてよもすがら 芭蕉  
とばしるも顔に匂へる薺かな 其角  
不産女の雛かしづくぞ哀れなる 嵐雪  
うづくまる薬のものと寒さかな 丈草  
寝がへりを打つぞ脇よれきりくす 一茶  
おのゝきて足すゝまさる繪踏かな 格堂

又客観的俳句を擧げて見ますれば

百舌鳥啼くや入日さしこむ女松原	凡兆
春の水山なき國を流れけり	蕪村
十六夜やかざめを逃す汐頭	几董
雪隠のかきがねはづす野分かな	召波
夏草にまじりて早き桔梗かな	子規
二三本葱の坊主や別れ霜	虚子

これらの句で以て兩者を見分けることが出来ませう。主観句は奥行へふかく、客観句は間口に廣いといふ感じは有るのでありますが、境地の深淺は主観客観とに抱はらないのであります。

櫻茶屋壺焼の火の草に赤し	虚子
花人を泊めて月小さき旅籠かな	蛇笏
硝子窓の人に池深し若風	零餘子

これら三句の如く一句の内に小主観の頭擡したる作品は、我々の考へてをります正しき俳句の内容ではないと思ふのであります。

山路来て何やらゆかし菫草 芭蕉

この句の初案が「何とはなしに何やらゆかし菫草」といふ句であつたのであります。この句は芭蕉が近江の逢坂山を越えて來た時の吟でありまして、山道をたゞひとり歩いてくると、足もとに人知れず咲いてゐる菫の花を見付けたのであります。その時、「何んとまあ奥床しいことであらう……」いふ心持から「何とはなしに何やら床し」と主観を露骨にあらはしたのでしたが、後から考へて見ますと、「何やらゆかし」といふ理由が判然しないのに氣がついたのであります。さうして何が故にゆかしく感じたのであらうか、といふことを靜に考へて見ますと、無味乾燥であつた山路の中を歩いて來た眼に菫の花を見付けたのであるから「ゆかしく」思はれたといふ事に氣がついたのであります。そこで上五句を「山路来て」と置直したのであります。かうして客観化されてはじめて完全な句となりましたが、この「山路来て」の背後には「何んとなく」の意味も十分に含まれてゐるものであります。主観を客観化することに俳句の表現法がある

のであります。

「季」重なり

一句の俳句に季をあらはすべき語が一つ以上に取入れられた俳句を、古來から「季」重なりとして忌み嫌つたのでありますが、どうして季重なりが悪いのか、その理由を申し上げませう。季をあらはすべき現象でありましても、單に客觀的にそれを見ただけでは季をあらはさない他の現象と同等のものでなくてはなりません。それに依つて我々の感動があつてはじめて客觀的に見た「牡丹」であると同時に感動的である生きた牡丹であります、がこの感動が一度冷靜に歸れば、牡丹も亦もとの一個の牡丹に歸つてしまつて、兩者の關係が斷たれる事になります。假りに一本の牡丹とそこにとんでゐる蝶々と猫とを同時に見て感動するところがあり。

牡丹やしろがねの猫こがねの蝶 燕 村

といふ句になつたのであります。この場合牡丹はボタンと讀むのであります。蝶々は俳句の

上にあらはれた季語のハタラキの作用を失つて、猫と同じのたゞの言葉として取扱はれてをるに過ぎないのであります。従つて「牡丹や」と詠歎されたところに、牡丹が作者の感動の象徴の的となつてをるのであります。

鶯	啄	五	夏	鮎	椎	木	收	蝉	鶉	芭	丈	汶	青	燕	曉	子	櫻	鬼	三
や	木	月	瘦	鮎	の	枯	め	蟋	舟	蕉	草	村	羅	村	臺	規	碗	城	幹
柳	鳥	雨	の	の	の	や	た	の	見	の	板	芭	蕉	の	の	の	の	の	の
の	や	や	節	た	實	芭	た	の	の	屋	蕉	蕉	の	は	は	は	は	は	は
う	枯	焙	々	よ	の	蕉	る	ね	ね	を	の	の	の	し	し	し	し	し	し
し	木	爐	高	り	板	の	鳴	か	か	は	屋	の	の	る	る	る	る	る	る
ろ	を	に	し	も	を	緑	子	へ	へ	は	は	緑	も	夜	夜	夜	夜	夜	夜
藪	さ	か	今	近	は	吹	壁	す	す	の	の	き	に	寒	寒	寒	寒	寒	寒
の	が	か	朝	き	し	き	懸	落	落	前	花	つ	煙	か	か	か	か	か	か
前	す	の	の	夏	る	く	草	葉	葉	芭	中	す	草	な	な	な	な	な	な
芭	蕉	秋	秋	野	な	す	草	かな	かな	蕉	の	す	草	な	な	な	な	な	な
蕉	丈	汶	青	燕	曉	子	櫻	鬼	三	蕉	草	村	羅	村	臺	規	碗	城	幹
蕉	草	村	羅	村	臺	規	碗	城	幹	蕉	草	村	羅	村	臺	規	碗	城	幹

海の上に月よもすがら盆踊 花鏡

かくの如く季をあらはすべき語が二つづゝ詠み込まれてありますが、「鶯」「花」「五月雨」「今朝の秋」「夏野」「夜寒」「木枯」「懸煙草」「落葉」「月見草」「盆踊」の諸語に感動的<sup>ま</sup>がありまして、白の圈點の諸語はこの場合、普通の語として扱はれてゐるに過ぎないのであります。

目には青葉山ほととぎす初鰹  
素堂  
蕪村  
茨老いすいき瘦せ萩おぼつかな  
燕村  
瓜くうて夜は秋近し蟲の聲  
挿雲

このやうに季をあらはすべき語が三つも含まれた例外もあるのであります。第一句は目には青葉を見て樂み耳には時鳥を聞いて樂み、味には初鰹を賞することが出来るといふ、視覺、聽覺、味覺の三つの樂みを一時に出来る初夏頌讚<sup>しやうざん</sup>を句外に利かせたものであります。此句の如きは餘程異例であります。第二句は茨も老いてしまひ、瘦せてしまつたあとに、おぼつかなくもとり残された萩の花の可憐さを詠じた句でありまして、茨も薄もこの場合たゞの言葉として使はれてゐる

あるのであります。第三句は縁側に出て冷し瓜をくひながら蟲の聲をきいてをると、そゞろ秋が近いのを覺ゆるといふのであります。この場合では瓜も蟲の聲も従の形で「秋近し」が主であるのであります。

要するに季語は二つ詠み込んでも三つ詠み込んでもさうつかへないのであります。たゞ次のやうな場合

杵散る中やあそべる四十雀

この句の如く、作者の感動的的が「杵散る」にあるか「四十雀」にあるか不明である作品は、一句の中心點を失ふに至るが故によろしくないであります。季重なりを忌むといふことは、畢竟するにかゝる場合に墮し易い故を以て、忌み嫌ふ約束のあるやうに、云ひ傳へられて來たものに外ならないので、決して約束などあるべき性質のものではありません。たゞ、作品となつた上の結果から云ふべきものに外ありません。なほ又假へ一句中に季をあらはす語がありません。も、一句全體からして四季を通じたいづれかの感じがあらはれてをりますれば勿論差支へないのであります。さうした例は往々冗漫になり易いといふ弊が伴ふのであります。

## 季語の特性

96

「動く」句といふのはよろしくないとされてをります。鬼貫も「ひとりごと」に述べました。「發句に動くといふ事侍り。たとへばつばなの句を、すみれの句にしていへば、又それにもなり、杜若の句を、あやめの句にして見れば、なるをこそ嫌ふことにて侍れ、餘はなぞらへて考ふべし。」

といつてをりますが、この動くといふ事は、その対象としての現象の特性なり特色なりが、的確に擱<sup>お</sup>んでゐないが故に、甲を乙にしてもいゝやうな曖昧<sup>あいまい</sup>な内容になるのであります。この曖昧であることを動くといふのであります。即ち茅花の句として詠じたものであり乍ら、茅花<sup>つばな</sup>を董と置きかへて見てもいゝやうな曖昧な内容、杜若の花を詠じたるに不拘、屋根に葺<sup>ふ</sup>くあやめと置き替へても済<sup>す</sup>まされるやうな曖昧な内容、かうしたのを動く句といふのであります。假へば

燃えたちて顔はづかしき蚊遣かな

蕪村

東門を出づれば野邊の董かな

子規

この句を假りに

燃えたちて顔はづかしき門火かな

東門を出づれば野邊の茅花かな

として見てもこの句の内容にさしたる變化を見ぬとすれば、この句の内容は動くものであります。

骨拾ふ人にしたしき董かな

蕪村

この句は下五を「茅花」に置きかへては句意を成しません、それは骸を火葬にし、その骨を拾ひに來た人が、愁ひの中に可憐な姿の董の花を見付けたのでありますから、董の可憐な趣からしまして、その拾つてゐる骨もその人の子供であらう事も判り、また「親しき」といふ心持も茅花ではあらはれないからであります、これは絶対に董でなくてはならない句で、所謂動かない作

品といはねばなりません。

總てものゝ特性を見るといふ事は、俳句に最も大切な事でありまして、假へば

金屏にかくやくとして牡丹かな

蕪村

牡丹といへばすぐにこの句の如き牡丹の花の絢爛としたものに對して、金屏風の輝かしさを照對せしめた、即ち牡丹の花の特性が絢爛としたものであるかの如き感じを聯想するに至りますのは、牡丹そのものゝ特性に觸れてゐるのではなく、牡丹を詠じた俳句又はその他の文學による概念に支配されてゐるのでありまして、さうした季語概念のもとに、句を作るといふことは本來の句作法としてはとらざるところであります。

牡丹の花を見るときは、單に牡丹の花のみを見るのでなくして、宇宙の聯續體として、牡丹の花と同時に、その周囲の空氣に觸れてゐるのであります。従つて、雨の日の牡丹、曇日の牡丹、晴天の牡丹、朝の牡丹、夕方の牡丹、晩春の牡丹、初夏の牡丹、とその各々の趣がありまして、さうしてそれらの背景の變化と、周囲の風光の取合せによつて、いろ／＼の變化があるのであります。歳事記の上では牡丹は「夏季」とせられてありまして、事實晩春に咲いたものを見れば、

晩春の牡丹としての趣きがあり、さうした趣を句に仕立てればよいのであります。牡丹だからといつて夏季といふ先入概念を先立てることは、既に概念に囚はれてゐる事になるのであります。

歳事記の春夏秋冬の區別は、たゞ便宜上に過ぎないものでありまして、桃の花と木の芽は殆ど同時に花をひらき芽を吹くのでありますが、感じの上からは木の芽の方が早く桃の花の方が遅く思はれるのであります。これは木の芽のもつ特性なり桃の花のもつ特性が、然う感じさせるのでありまして、その特性を把握することが句作上最も大切な事であります。

千篇を一律にとぶ蜻蛉かな	碧梧桐
葉を切りて趣もなき蕪かな	六花
尻高ににげてふりむく鹿の子かな	松濤樓
水仙や二尺にあまる花の丈	梓月

これらの句は、「蜻蛉」「蕪」「鹿の子」「水仙」そのものだけについての特性を、作者の一つの見方によつて云ひあらはしてをるのであります。

季語の各々のもつ特性をとらへて、それにそれ／＼の配材によつて一つの境地を作り出さうと



いふ句法は、元祿時代にも見受けられぬ事はありませんけれども、主として蕪村以後に多くその例を見るのであります。

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏  
芭蕉  
鶏の子の嘴よごしけり春の雨  
維駒

これらの句の如く、寫實そのものに近い作品に比べて

春雨にぬれつゝ屋根の手毬かな  
蕪村  
春雨や簀の下なる戀衣  
几董

これらの句に見る如く「春雨」といふ季語のもつ特性に鑑みて「屋根の上の手毬」「簀の下の戀衣」といふ艶麗な趣を配材して一つの境地を示したものでありますが、これらの趣は天明時代以後に多く見受けられるのであります。

關越ゆるるゐざり車や蝸牛  
蕪村

「蝸牛」のおのが棲家を負うて、遅々としたありさまに對して、同じく車の中を自分の家とした燈の歩みの、その相似たるものを配合せしめたものであります。

かたはらにかぼちや花咲く野菊かな  
召波

「野菊」といふ可憐でしかも氣品のある花に對して、何んとなし男性的で野趣満々たる南瓜の花、この二つの花の特種な趣きを取合せて、野菊の花の特性と、全く反對の南瓜の花をあしらつたのであります。

蒲公英やローンテニスの線の外  
子州

「蒲公英」といふ花の特性からテニスコートスコートの線を配材したものでありまして、黄色の花に白い線の對照。蒲公英といふ花が、好んで路傍や庭園に近いところに生えるといふ性質を、巧みに把握して、配材を選らんだ作品であります。

讀書子がランプの笠や青蛙  
挿雲

「青蛙」は枝蛙のことで、時に家の中までとび込んで来る瓢箪者であります。その特性を攫へて来て、讀書子のランプの笠に配したのであります。これが「蝨」や「蛾」ではこの句の味が出ないのであります。従つて青蛙としての特性を確實に把握しあるものといふことが出来ます。

西京や鹽賣る家の花八つ手

薫風郎

「八つ手の花」の白色に對して、鹽の白色を配材せしめて、老舗の店先の光景と、寒さの感じをあらはすに遺憾なくして、さうして「西京や」と置いて一層それらの諸點に確實性を與へてをるのであります。

げんげんに神崎禿遊びけり

小 蛄

「げんげん」は蓮華草の花の事で田に肥料として作られるもの、「神崎禿」は、攝津の神崎遊女の女童をいふのであります。げんげんといふ花の特性が、上品な花の趣でなく、何んとなく花柳社會の子女を思はせるやうな形なり色合なりでありますところから、浪花はづれの神崎といふ鄙びた遊女の女童を配材せしめたのであります。

押入に寒き竹奴や冬籠

山 梔子

「冬籠」のもつ特性に對しく全く正反對の夏季用ふる「竹奴」を配詠したるものであります。

傘かへす文一筆や燕 冬 葉

「燕」はツバクラメと読み、この敏捷な鳥の特性に對し、借り傘を返すに添えた手紙の一筆書きを配材せしめて、單純化による効果を求めたものなど、いづれも季語のもつ特性とそれに配材する事象を融合化せしめ得たものであります。

### 人事俳句

もの焚いて花火に遠きかゝり舟  
やわらかに人分けゆくや勝角力

蕪 村  
几 董

家族従者十人ばかり墓参  
子規  
鮮の魚大骨小骨抜きにけり  
樂南

假りに俳句の約束を知らぬものがこれらの句を見て、春夏秋冬のいづれの事象を詠んだものであるか一寸判り難く感ずることでありませう。しかし次の句を見る時同じ「花火」「角力」「墓参」「鮮」の句を詠じてあつても、春夏秋冬のいづれの事象であるかといふ事がすぐ判ることと思ひます。

黍畑のはづれで見たる花火かな  
虚子  
貌よくて弱き角力や男郎花  
鳥不關  
提灯で萩押しわくる墓参かな  
醉佛  
青すゝき丈なす宿や一夜鮮  
乙字

花火は昔は専ら秋季に行はれたものでありましたし、相撲も古昔宮中に於て七月に行はれたものから、民間の宮相撲や草相撲も秋季となり、墓参も同様秋季、鮮は夏季といふ事にされてあり

ますが、現在ではこの例に従つてをりませぬから、さうした季によつてこれらの語を差別する事が出来ないのがありますが、今これらの句を見ると、「黍」「男郎花」「萩」「青すゝき」等の語のもつ介添役によりまして、假へ「花火」「相撲」「墓参」「鮮」が季語とされてをりまして、事實上季を現はすものは「黍畑」「男郎花」「萩」「青薄」にありますから、本當の意味の季語はこれらにあるのでありまして、これらによつて秋季又は夏季といふ事が判るのであります。これは天然自然に何等關係を有つてをらない人事現象であるが故に、人事のみを詠じたのでは季感をあらはす事が出来ないといふ何よりの理由になるのであります。

俳句は基より天然自然を詠ずるといふところに、本來の目的があるのでありますから、人事も自然の中に織り交ぜて詠じてこそ一層意義がある譯であります。しかし乍ら同じ人事現象でありまして、單なる人事現象とせずして

乾鮮にくひさかれたる紙子かな  
木導  
物の音ひとり倒るゝ案山子かな  
凡兆

この句の如く人事現象を超然として詠じた場合は、自然現象を詠じたものと同等に見ることが

出来ると思ふのであります。

## 地方色

地方々々によつてあらはれる四季の現象の變化は、同じ時雨でありましても、京都地方のそれの如く紅葉のうへに明るく降る時雨に對して、東北の時雨は馬の背を分けるやうな時雨でありますし、東北の雪の感じと關西の雪の感じは全く異つてをります。その他行事や祭事又は風俗など非常に相違してをるのでありますから、

木の下に幕や打ちけり風の陣 田士英

この句の如く樹下に幕を張りめぐらしての風合戦の趣は長崎地方の特有なもので、他に多く見る事が出来ぬでありますうし

鋤きあげて用なきさまの冬田かな 湖東

田畑を耕すのは春又は秋多くこれを見るのでありますが、この句の如く冬耕をする常陸方面の習ひも珍しく

海馬肉のカレーライスや夜半の冬 乙々

かうした光景は全く内地では見る事が出来ず、これは北海道も北部に住居する作者によつてはじめて經驗せられた事でありませう。

能登馬の曳かるゝ麥の伸びにけり 花笠

越中地方の現象で、冬季田家の馬を能登へ預けて置いて、春季にいたつていよく農繁期に入らうとする頃、その馬を迎ひに行つて五六頭づゝ連れて曳き戻る光景であります。

短日の梯子を賣つて戻るなり 冬葉

梯子賣の來るやうな光景は京都地方に於いて殊に目につくのであります。その外歳事記にあらはれてをります、地方々々の特殊な諸現象はその一々については擧げきれぬ程ありますが、要す

るに地方々々の現象を普遍的感動を以て詠すればよいのであります。

## 形式と音調

### 十七文字音調

俳句の形式は和歌の五七五七七の上五七五だけが分れて獨立したものでありますが、獨立いたしましてからは五七五文字といふのは大きな一つの目安に過ぎないのであります、かなり自由な範圍内の作例を多く見るのであります。

大體に於いて五七五文字といふのでありますが、獨立分野を示すに至つてからその内容もそれにつれて種々雑多でありまして、その内容に伴ふリズムも必ずしも五七五文字とのみは定め難いのであります。しかしながら、邦語のもつ音脚と吾人の心臓呼吸器の關係から之を原理的に見る

なれば、五七五文字調に定形されるのが、必然的理由でなければならぬといふ事になります。

芭蕉野分して鹽に雨をきく夜かな 芭蕉

今この句の語の音脚についてしらべて見ますれば、

八 {
 

バ	三
セ	三
ヲ	三
ノ	二
ワ	二
ケ	二
シ	二
テ	二
タ	三
ラ	三
ヒ	三
ニ	一
ア	二
メ	二
ヲ	一
キ	二
ク	二
ヨ	一
カ	二
ナ	二

右の如く八七五文字を示し、又次の如きは

海暮れて鴨の聲ほのかに白し 芭蕉

五 {
 

ウ	二
ミ	二
ク	二
レ	一
テ	一
カ	二
モ	二
ノ	一
コ	二
エ	二
ホ	三
ノ	三
カ	三
ニ	一
シ	二
ロ	二
シ	一

右の如く五五七文字を示してゐるのであります。その他

耳目肺腸こゝに玉巻く芭蕉かな 蕉村

八 {
 

ジ	一
モ	二
ク	二
ハ	二
イ	二
チ	三
ヤ	三
ウ	三
コ	二
コ	一
ニ	一
タ	二
マ	二
マ	二
ク	二
バ	三
セ	三
ヲ	三
カ	二
ナ	二

心太さかしまに銀河三千丈 蕉村

五 {
 

ト	五
コ	五
ロ	五
テ	五
ン	五
サ	四
カ	四
シ	四
マ	四
ニ	一
ギ	三
ン	三
ガ	三
サ	二
ン	二
ゼ	二
ン	二
ジ	三
ヤ	三
ウ	三

朝顔や手拭のはしの藍をかこつ 蕉村

五 {
 

ア	四
サ	四
ガ	四
ホ	四
ヤ	一
テ	四
ヌ	四
グ	四
ヒ	四
ノ	一
ハ	二
シ	二
ノ	一
ア	二
キ	二
ヲ	一
カ	三
コ	三
ツ	三

水澗々蓼かあらぬか蕎麥か否か 蕉村

六 {
 

ミ	一
ヅ	一
カ	二
レ	二
ガ	二
レ	二
タ	二
デ	一
カ	一
ア	三
ラ	三
ヌ	一
カ	一
ソ	一
バ	一
カ	一
イ	一
ナ	一
カ	二

山人は人なりかんこどりは鳥なりけり 蕪村

四  
サンジン 一  
ハ 二  
ヒト 二  
ナリ 二  
六  
カンコドリ 五  
ハ 一  
トリ 一  
ナリ 二  
ケリ 二

石の上に薔薇花散る雨重し 子規

六  
イシ 二  
ノ 一  
ウエ 二  
ニ 一  
七  
イバラ 三  
ハナ 二  
チル 三  
五  
アメ 一  
オモシ 二

我笠と我蓑を着せて案山子かな 碧梧桐

五  
ワガ 一  
カサ 一  
ト 一  
八  
ワガ 一  
ミノ 二  
ヲ 一  
キセテ 一  
五  
カガシ 三  
カナ 二

若葉曇り郭公鳴いて降らしけり 乙字

六  
ワカバ 三  
グモ 二  
リ 一  
七  
カツコウ 四  
ナイ 一  
テ 一  
五  
フラ 二  
シ 一  
ケリ 二

双飛湖上にわかるゝ鳥や秋の雨 波空

八  
サウヒ 三  
コジヤウ 四  
ニ 一  
七  
ワカル 四  
トリ 二  
ヤ 一  
五  
アキ 一  
ノ 一  
アメ 二

かくの如く八七五、五五五、五八六、六七六、九五六、六七五、五八五、六七五、八七五、などの文字数があらはれてをりますので、俳句の形式は必ずしも五七五文字でなければならぬといふ、古い考へ方を捨てなければならぬものであります。又同時に俳句は十七字音を中心とした形式であるといふ目安も着いた譯けであります。然し乍ら先にも述べたやうに、邦語のもつ音脚が二音三音が最も多く、一音四音がこれにつき五音にいたりますと餘程少例になつてをります。これらの語の組合せから

閑さや岩にしみ入る蟬のこゑ 芭蕉

かけく／＼て月もなくなる夜寒かな  
 春風に尾をひろげたる孔雀かな  
 子 燕 規 村

五 { シ<sup>三</sup>ヅカ<sup>一</sup> サ<sup>一</sup>ヤ<sup>一</sup> イ<sup>二</sup>ハ<sup>二</sup> ニ<sup>一</sup> シ<sup>二</sup>ミ<sup>一</sup> イ<sup>二</sup>ル<sup>二</sup> セ<sup>二</sup>ミ<sup>一</sup> ノ<sup>一</sup> コ<sup>二</sup>エ<sup>二</sup> }

五 { カ<sup>一</sup>ケ<sup>一</sup> カ<sup>一</sup>ケ<sup>一</sup> テ<sup>一</sup> ツ<sup>二</sup>キ<sup>二</sup> モ<sup>一</sup> ナ<sup>二</sup>ク<sup>一</sup> ナ<sup>一</sup>ル<sup>一</sup> ヨ<sup>三</sup>サ<sup>三</sup>ム<sup>一</sup> カ<sup>一</sup>ナ<sup>一</sup> }

五 { ハ<sup>二</sup>ル<sup>一</sup> カ<sup>一</sup>ゼ<sup>一</sup> ニ<sup>一</sup> フ<sup>一</sup> フ<sup>一</sup> ヒ<sup>三</sup>ロ<sup>三</sup>ゲ<sup>一</sup> タ<sup>一</sup>ル<sup>一</sup> ク<sup>四</sup>ジ<sup>四</sup>ヤ<sup>四</sup>ク<sup>一</sup> カ<sup>二</sup>ナ<sup>一</sup> }

右の如くなりまして第三句の「クジヤク」の「ジャ」の撥音が一音となつて調子の上では五七五文字に續まれるのであります。

かくて、俳句は五七五文字文學であるといふ事は、その作品の大勢が見て勿論異論のないところではありますが、必ずしも五七五文字でなければ俳句ではないといふやうに考へてゐる人が若し

あるとすれば、それは前例の如き作品の存在に對しても、既に明かな誤解であると云はねばなりません。故に俳句の形式は十七文字でなく十七文字のもつ音内にある形式といふやうに考へておけばよろしいと思ふのであります。

### 形式の變化

物柔い春雨の感じ、明るい夏野の感じ、強烈な野分の感じ、陰慘な大雪の感じ、かうした各々變つた感じのする内容は、必ずしも一定の形式に盛らねばならぬといふ、先入的概念を以て處して行かうとするのはよくないのであります。

奈良 七重 七堂 伽藍 八重櫻 芭蕉  
 唐崎の松は花よりおぼろにて 同  
 馬ほく／＼我を繪に見る夏野かな 同  
 夏衣いまだ風をとりつくさず 同



芭蕉野分して鹽に雨をきく夜かな  
同  
海暮れて鷗のこゑほのかに白し  
同  
年暮れぬ笠着て草鞋穿きながら  
同

これらの句を一見して知る如く、その内容によつて、表現形式をおのづから異ことにしてゐるのであります。また

鶯の聲遠き日も暮れにけり  
同 蕪村  
梅遠近南すべく北すべく  
同  
更衣野路の人はつかに白し  
同  
閑古鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ  
同  
朝霧や杭打つ音丁々たり  
同  
水かれく蓼かあらぬか蕎麥か否か  
同  
炭團法師火桶の穴より窺ひけり  
同

めしつぶて紙衣の破れふたぎけり  
同

これらの作品も内容につれてさまざまの形式を示してゐるのであります。如何なる内容であつても、必ずしも一定した五七五文字に當嵌あてはめなければならぬといふ謂いひはないのであります。内容に順じて適宜な表現形式をとるのが最も自然なことであります。

然し乍ら、かゝる例はありまして、俳句は五七五文字音の定形律俳句であるといふ事には少しも變りのない事でありまして、十七文字より長い句をその例外だと思つたり、俳句でないかの如く誤つた考へを持つてゐるものに對して、敢へて例を引いたのであります。

月天 心貧しき町を通りけり  
同 蕪村  
牡丹散つて打かさなりぬ二三片  
同  
羽蟻とぶや富士の裾野の小家より  
同

これらの句はいづれも

ツキテンシン	マヅシキマチヲ	トホリケリ
六	七	五
ポタンチツテ	ウチカサナリヌ	ニサンベン
六	七	五
ハアリトブヤ	フジノスツノ	コイヘヨリ
六	七	五

この通り上五文字であるべきが一文字づゝ多く使はれてをりまして、然もいづれも「月天心」「牡丹散つて」「羽蟻とぶや」とこれらの六文字だけで既に明らかに、光景を叙してをるのであります。これは俳句の形式が短小であります故に必然的にかく運ばれて来たものと見效すべきであります。和歌の場合の如く、すら／＼と詠み出すそれとは大きに異つてをります。端的に月天心と一氣に叙して於いて、さうして、下五文は「通りけり」とすらりと置いてありますのは、上を重く下を軽くといふ風の形式をとつたのであります。「あしびきの山川の瀬の鳴るなべに」と上五文字より軽く云ひ出して、下句の「弓月が嶽に雲たちわたる」の如く下五を重々しく置い

た和歌とは反対な形でありまして、俳句が造形美術的で、和歌が音楽的であるといふことも、これによつて窺ひ知ることが出来るのであります。

## 二句一章

俳句は、ある聯結された一つ概念と、さうしてもう一つ概念とが、作者の感情の熱によつて打ちのべられた黄金の板のやうなものであります。今この二個の概念を二分して見ますれば、一つは季語分子であり、もう一つはそれに配材せらるゝところの他分子であるといふことが出来ます。これを一層具體的に申しますなれば

場所は東京の隅田川か大阪の淀川、その他どこでも大きな何で流の緩やかなところ、そこに渡し場があつて、折りしも木の芽頃の絹絲のやうな細雨が音もなく降つてをる。渡し舟に乗らうと思つてやつてくると、恰度今舟が岸を出たばかりで、十二三人の客を乗せて靜かに中流へと棹さしてゐる。客は立つてゐる人もあれば腰をおろしてゐるものもあつて、いづれも傘をさしてゐて、その傘が明るく、渡し舟をして一層靜かにしてゐるやうだ。

かのやうな光景によつて

春雨や傘高低に渡し舟 子規

かうした句になつたのでありまして、「春雨」といふ一個の概念と「傘高低に渡し舟」といふ一つ以上の概念の集合したる概念とが、作者の感情の力によつて融合化を遂げて一章をなしてゐるのであります。

かく俳句は「春雨や」の一句に對して「傘高低に渡し舟」の一句即ち二句が一章を成してゐるものであるといふ事は、元祿時代の支考が既に云つてをるのであります。また蕉村も「斷字」といつて、二句一章をほめかしてをりますが、之を論理的に「俳句は二句一章である」と、裏書を強くしましたのは乙字であります。

父母のしきりに戀し・雉の聲 芭蕉  
撫子に・願ひしほどの小雨かな 尙白  
絶えくゞに温泉の古路や・苔の花 蓼太

残雪や・茶山守る家の煤障子 五明

「父母」「しきりに」「戀し」と各々の概念の集つた一個の「父母のしきりに戀し」といふ概念と「雉子の聲」といふ概念が併列に融合したるもの又は「絶えくゞ」「温泉」「古路」の如き各概念の集つた一つの「絶えくゞに温泉の古道や」といふ一個の概念と「苔の花」といふ一個の概念が併列に融合したものでありまして、尙白の句も五明の句も同様であります。

さかさまに撫子さがる・高嶺かな 爲陸  
かきつばたしどろに咲きし古江かな 信徳  
奥ふかに巢鷹の鳴くや・雄神川 浪花  
しんくゞと梅ちりかゝる・庭火かな 荷兮

これらの句は、季語分子が一つ以上の概念の中に交つて、他分子が一個の概念を示したるもの

鶯や・餅に糞する縁の先 芭蕉

鷄合・左右百羽を分ちけり

召 披

これらの句は季語分子が一個の概念を示し、他分子が季語分子の説明をかねて一個の概念を示してゐるもの

手をついて歌申し上ぐる・蛙かな

宗 鑑

他分子が全く季語分子の説明になつてゐるもの

古寺の桃に・米ふむ男かな  
人なき日・藤に培ふ法師かな

芭 蕉  
蕪 村

これらの句は、季語分子が他分子に包含された一つの概念と、一つ以上の概念が集つた一個の概念たる他分子とによつて成つたもの

かういふ風に季語分子と他分子の融合は、併列の場合も主になつたり従になつたり、或は交錯されたりする場合も、さまざまありますが、異例を除いてはいづれも二句から成つた一章といふ

のが俳句の形式の根本であります。

何が故に二句を以て一章を成すに至つたかといへば、我々の心臓と呼吸器の関係から、一句は長くても五七を基調とする十二三文字から十四五文字までが、一呼吸に適してゐるといふ根本原理がそれでありまして、それに五文字を配するといふのが短詩形として最も變化に富んだ音律であるからであります。

## 句 切

二句一章の句と句との間に用ひるところの感歎詞、俗にいふ切字といふ、即ち何々やのや、又何々けりのけり、或は何々かなのかなの類は、必ずこの切字を一句の内に読み込まなければならぬといふやうに考へられてをるのでありますが、實は決してさうではなく、一つの句の意味を強めるために置かれる詞でありまして、茲で句の意味が切れるとの意味ではないのであります。従つて在來からいつてをりますところの、「切字」といふことすら穩當でないのであります。この切字があつても無くても句意の切れ目はついてをるのであります。

山門を出て下りけり・秋の山  
よせかけし傘の雫や・花御堂  
藪入や・父のおとろへ母の老  
子規  
牛歩  
梓月

これらの句は「けり」とか「や」の切字のあるところに句切があるのでありますが

背戸口の入江にのぼる・千鳥かな  
鮮桶を洗へば・浅き遊魚かな  
冬木立・月・骨髓に入る夜かな  
丈草  
蕪村  
几董

これらの句には句切の場所に切字はありませんが、句讀點を入れた個所々々で切れることになりまして、いづれも下五に感歎詞が置かれて、全體の調子を強めてをります。更に

小男鹿やころびうつたる蕎麥島  
鷄頭や松にならひの清閑寺  
許六  
其角

ふつゝかに青葉や交る桃の花  
宮島や廻廊に夜の明易き  
うき雲や左右に分れて青嵐  
茂山やさては家あり初紅葉  
かきつばた魚やすぎけん葉の動き  
雨邑  
涼菟  
史邦  
蕪村  
几董

即ち  
これらの句を、假に切字とされてある個所で讀むなれば、全く句の意味をなさなくなります。

小男鹿やころびうつたる蕎麥島  
鷄頭や松にならひの清閑寺  
ふつゝかに青葉や交る桃の花  
宮島や廻廊に夜の明易き  
うき雲や左右に分れて青嵐  
茂山やさては家あり初紅葉

かきつばた・魚やすぎけん葉の動き

この句讀點を入れたところで切つて讀んでこそ、これらの句の意味が判るのであります。でありますから、切字となるべき語がありましても必ずしも、そこで句意が切れるといふ譯けではないのであります。

又次の句の如き場合になりますと

辛崎の松は花より臙にて

芭蕉

かうした句は

辛崎の松は花より臙にてあり

といふやうに一句の外に句切れがあるのであります。

又次の句の如き場合

秋風や息災すぎて野人なり

北枝

灌佛や雲慶閑に刻みけり  
朝霧や杭うつ音丁々たり  
初雷や耕人馬を逸しけり  
打水や垣の潰れを起しけり  
放鳥や花松にゐしがいにけり

召波  
蕪村  
樂南  
山梔子  
蛻骨

一句の中に句の切るゝ詞が二ヶ所にある作品も見受られますが、これらは多くの中での異例であります。必然的要求としての二段の句切といふのではなく、「秋の風」「灌佛は」「朝霧に」「初雷に」「水行つて」「放鳥の」といふべきを調子の上か或は不用意に置いたものと考へらるゝのであります。

一句に三段切を忌むといふことをいひますが、一句の内で二ヶ所切るゝ所がある事は、文章の組織上無理なことでありまして

目には青葉・山時鳥・初鰹

素堂

柳散り・清水涸れ・石處々

燕村

これらの例外を除いては三段切の句を散見する事はありませぬ。これは俳句の形式からして、おのづから三段になることの少い證據であらうと思はるゝのであります。

### 省略

俳句はその形式が短小であるところから、表現されたものより以外に表現以上の効果を求めんとして、飛躍の世界による省略法を案出したのであります。

熊の出、て牛闘へる○○○○○  
袴から首がぬけたる○○○○○  
押入に寒き竹奴や○○○○○  
香炷いて人の自刃や○○○○○

これらの句の下五を假に覆うて、上十二文字の句意だけで以て、下五を想像しても全く判らないのでありますが、しかし

五女ありてあとの男や○○○○○  
客僧の行水するや○○○○○  
簑を着て草刈る人や○○○○○  
羊飼ひの唄うてくるや○○○○○

これらの句の場合は前の句とは異つて、ある程度までは見當がつくのであります。五人の女の子があつてそのあとの男の子であるから―五月節句であらう。客僧の行水する庭でありますから―夏の夜の光景であらう。簑を着て草刈る人だから―夏の雨であらう。羊飼が唄をうたひつゝ來るのだから―のどかな光景であらうと、それに近いところまで想像がつくのであります。即ち

五女ありてあとの男や初轍 子規  
客僧の行水するや夏の月 漱石

簑を着て草刈る人や五月雨  
月村  
羊飼ひの唄うてくるや春の風  
秋竹

かうした原句に近い想像が、上十二文字のもつ感じだけで或る程度までつくのでありますが、前掲の四句にいたりますと全く想像がつかないのであります。

二句から成る一章の俳句の一句だけの概念のもつところの感じから、他分子としての一句の概念の想像がつかないのは、思ひもよらぬ概念と概念とが飛躍融合化を遂げてゐる證據であります。即ち、その概念と概念との飛躍境にある大きな省略の溝があるのであります。

熊の出で牛鬪へる霞かな  
碧梧桐  
袴から首がぬけたる土筆かな  
乙字  
押入に寒き竹奴や冬籠  
山梔子  
香炷いて人の自及や春の雨  
櫻碗子

かうして一つの概念の季語分子を入れて見ますと、東北の大きな牧場の雪解時分の雄大なる光

景、「土筆かな」と置かれて「何る程」と合點せられる妙境、冬籠に全く反対なる對象の配合の面白味、春雨の音の中に幕切のあるやうな劇的シーン。これらはいづれも句切にある省略の効果が齎してゐる大きな餘韻餘情でありまして、短詩形として必然的に、表現せずして表現以上の効果を求むるに至つた所産であらうと思ひます。

この省略法はひとり俳句のみでなく南畫の餘白、三味線の間などと共に東洋藝術の特長とすべきものであります。

### 用語

如何なる詩歌の場合でもさうであります。形式の短小であるところの俳句にありましては、一層その感を強くするのであります。俳句になるべき内容を感情の力によつて表現しやうとするに際して、その内容につれての表現形式はたゞ一つより外ないといふ事でありまして、内容を表現するにその言葉や用語の選擇は最も大切なことでありまして、一字だにもゆるがせに出来ないことは勿論、言葉なり用語に依つて、その内容が生きるか死ぬるかといふ、いはゞ重大なる使命



をもつてをるのであります、さうして一方又その内容につれて表現上の用語はきはめて自由自在でもあるのであります。

唐崎の松は花より囃にて 芭蕉  
吹きとばす石は浅間の野分かな 同  
海暮れて鷗のこゑほのかに白し 同

これらの句の如くでありまして、この内容を表現しやうとするには、かうした表現、形式をとるより外になかつたであります。

出る杭を打たうとしたりや柳かな 蕉村  
月天心貧しき町を通りけり 同  
芒枯れ茨老い萩おぼつか 同

これらの句の内容をあらはすには、かうした用語の撰擇が必要であつたらうと思はれます。

信濃では月と佛とおらが蕎麥 一茶  
きりくしやんとして咲く桔梗かな 同  
疲蛙負けるな一茶こゝに在り 同

これらの句の場合でも、内容と表現とは性格美を通じて、よくあらはれてをります。要するに上流社會にのみ行はれてゐた連歌から平民的へと分離して來た俳諧が、その言語の上にも平民的に自由に發達して來たことは見逃せない事實であります。和歌の見地からは到底想像だにも出ない、俗語や方言を自由自在に用ひてをるのであります。これが又俳句の發達を助けた基因の一つであるとも見られますが、然し、如何に表現上に言葉や用語の撰擇が大切であるといつても、より以上の撰擇は必要を見ないのであります。内容より以上の言語を飾るとき、そこに月次の第一歩の擡頭があるのでありますから、如何なる場合でありましても、言葉や用語より感情につれての内容が優勢でなければならぬのであります。言葉の綾でもつて内容を飾らうとした作品の多い今日、特にその感を深くするものであります。

## 俳句の叙法

俳句に於ける季語の意義と、形式の條理の二つが理解されたならば、俳句そのものが判つたといつてもよろしいのでありまして、既に述べ來つた、味ひ方、季語、形式の各項目に依つて俳句といふものゝ、大略が了解されたことゝ思ふのであります。それでこれから作り方に就て述べようと思ふのであります。衣服なればひとつの布を裁つてそれを縫つて仕立てるといふ順序があるのであります。詩歌は天衣無縫の姿でありますから、特に作り方といふやうなものは無いのであります。それで俳句の道に入るべき口ならしとして、私の句作經驗を主として述べて、それに代へることを豫め御承知置き願ひ度いと思ふのであります。

「俳句は入り易くて極め難きもの」と古來から云はれてをりますが、實にその通りでありまして、俳句は卑近な一些事を詠じて、頗る妙味津津たるものがありますのと、その形式の簡單、

用語の通俗であることなどが、誰しもこの道に入るに便利ならしむるのでありますが、さて、入つて見てこれを極めるといふことは、一朝一夕の業では到底出来得べくもない至難のことです。それは恰度白雲の表に聳えたつた青山の頂に登るやうなものでありまして、その麓に數ある難所を打ち越え／＼て行くには、ひたすら精進と忍耐と勉強と努力に待つ外のないのであります。橋なき谿谷に頓座したり、九十九折の險に引返したりして、遂ひに頂上どころか、雲の表にさへ出ずして中止するものが多いのであります。

登山に於いてよき案内者が必要であるがごとく、俳句を學ぶものにはよき案内者としての指導者を選ぶことは最も大切なことでありまして、この指導者の選擇如何によつて、學ぶものゝ一生を左右せらるゝものとも云へるのであります。従つて指導者は俳句に對して正しき考へ方の持主であり、又作者として正しき道を歩みつゝある者でなければなりません。のみならず勝れた人格の持主でなければならぬ事がその第一條件であると思ふのであります。

### 自然の靜觀 (作り方の一)

現在我々の句作法としては二種の方法をとりつゝあるのであります。その一つは自然靜觀によつて句を作るといふ方法であり、もう一つは季語を題に課して、それによつて自己の經驗を喚び起して作るといふ方法であります。前者を第一義的句作法とし後者を第二義的句作法と假りに稱んでるのであります。しかし、その結果の良否は、出来上つたものゝ價値如何によるものであります。兩者いづれがよきかといふことは即斷しがたいものであります。

日常の起居に際しまして、事物を注意して觀るといふことは、其の何よりも大切なことであります。假へば一つの花の咲く状態にしましても、一匹の虻蜂の動作にしましても、或は吹く風の音、流れる水の聲、その他樵者漁者の言葉つきに至りますまで、心をくばつて注目してゐることです。然し乍ら、いくら事物を注意して眺めてをりましても、眺めてをるといふだけではいつまで經つても對象と自分とが兩立してゐるのみであります。事物を眺めてをりまして、それによつて何等かの感興が湧いてくるときにはじめて詩心のそよぎがあるのであります。對象によつて動いてくる感興が大きければ大きい程、詩への効果も亦大きい事は勿論であります。對て、この感興が最も大きく動いた時、よく自然と一枚になるの境が得られるのであります。従つて事物によつて起つた感興が二であるより五である方が、五であるより七である方が、その作品

の方の効果はより良きものでなければなりません。

事物によつて何等感興の起らないものを、強いて有らしめやうとした、人為的感興とでもいふが如きものを教へた句作法を見受けるのでありますが、これらは勿論正しい作り方だとは申されません。四時の氣象の變化によつて、止むに止まれぬ状態によつて起つてくる感情でなければならぬのでありまして、假そめにも俳句を作らうといふ豫めの用意ある心持ちで、事物に對することはよろしくないであります。

作並温泉

涼しさや行燈うつる夜の山 子規

夏山を廊下づたひの温泉かな 同

大石田

秋立つや出羽商人の訪ひ船 同

酒田

鳥海にかたよる雲や秋日和 同

羽後湯田

山の温泉や裸のうへの天の川 同

これらの句は明治二十六年の夏芭蕉の「奥の細道」のあとを追うて旅した子規の「はて知らずの記」の中にある作品であります。對象によつて起つた自己の感情を、何等の粉飾なく詠じてある佳作といふことが出来ませう。しかし、同じ旅行の句でも

松島

夕立の虹こしらへよ千松島 子規

海は扇松島はその繪なりけり 同

などは、その對象とせらるゝところが松島であるだけに、作者の興奮が主觀に訴へてあらはれてゐるのであります。又「海は扇」とたとへ、「松島はその繪」だとしたところに、作者の作爲といふものが多分に含まれてをりまして、それがための不純分子を同時に認めなければなりません。

浅間温泉

明日も晴れん乗鞍見えて夕蜻蛉

乙字

赤倉途上

妙高の雲うごかねど秋の風

同

これは大正八年十月乙字の「戸隠吟行」にある句でありまして、夕雲の上にぬけ出て晴れ切つた乗鞍岳の遠望と、眼前を無心にとんでをります蜻蛉とを配合して、その土地の人が「乗鞍が晴れた時は必ず明日は天気である。」といふ、永い間の體驗から成る言葉を作者が聞きのがさずして、一氣にこの句を纏めたのであります。又第二句の茫冥たる壹野を吹き渡る秋風の中に、妙高にかゝつた一朵の白雲が動くともしないのを望んだ馬上吟、實に大觀一氣に詠ぜられてありまして、小主觀と技巧のみに偏した當代の作句のそれとは到底似もつかない高いものでありませう。

西行途上

駒鳥鳴くや伊吹をすぎて旅心

鳥不關

近江路や溝もせせらぐ猫柳

同

句佛上人の御閑居に日暮るゝまで伺候す

我も老いぬ彼も老いぬと御日永

同

これは昭和五年五月「杖頭煙霞」として「癩祭」へ發表されたもので、名古屋在の小牧といふところに居住する作者が伊吹山の麓を過ぎる時、駒鳥の聲を聞いて旅心になつたありのまゝを詠じてをるのであります。又近江路にかゝつては、猫柳にせゝらぐ溝川の音さへも、十分に春と領かれる句、句佛上人と作者との閑話、これらはいづれも作者の感情によつて、對象を生命化してをることが判るのであります。

遍路ごゝろけふあすもなき櫻かな

牛歩

花の風に吹きちる御影を拾ひけり

同

鶯に下向の心澄みにけり

同

暮れ惜み泊りを惜む遍路かな

同

笠ながら雲雀につげる別かな 同

これは矢張り「彌祭」に掲載された牛歩の遍路吟でありまして、四國八十八ヶ所の巡禮によつて詠ぜられた作品であります。これらの句を見て第一番に感ぜらるゝ事は、自我といふ事の少しもあらはれてゐない事で、大自然の懐の中にあつて安々と歩いてゐる作者の天稟に映じてくる自然が、ありのままに表現されてゐるのであります。如何に表現しやうか、如何なる用語を撰擇しやうかなどいふ考の毫も見られない、作者平常の精進と手腕によつて樂々ともものされてゐるのであります。

親不和

海山のあひだに咲ける櫻かな 冬葉

越中に入りて

花時に干されて氷見の鯛かな 同

飛弾山中

あけぼのゝ花しづかなり種下し 同

驛よりも高き炭荷や山ざくら 同

雉鳴くや國をまたげて御料林 同

これは昭和七年四月に旅した時の拙作であります。山と海との相迫つた中に咲いてゐる櫻、又花時に干されてある鯛、あけぼの花の静かな下での種下し、飛弾萩原驛の炭荷出しの光景、飛美の國境にある御料林、などいづれもありのまゝ見たまゝを詠じてをるのであります。

俳句の形式は十七文字だとか、季題を詠じ込まねばならぬとか、そんな考へは句を作るときに先立てゝはならないのであります。以上子規、乙字、鳥不關、牛歩、及び冬葉の各作品に就いて見ても判る通り、さうした考へなど無く、單に天然自然やその土地の風俗などを靜かに眺めて、それによつて起つてくる感情を、端的に詠じさへすればよろしいのであります。従つて

笠 島

我はたゞ旅すゞしかれと祈るなり 子規

の如き十八文字を示しても

遍路吟

大龍寺下向行手の山の焼くる見ゆ

牛歩

の如く時に二十文字を示しても、

撲天鷲君來庵句會

足るも足らぬもあるたけの團扇かな

鳥不關

この如き七五五の調を示したのも

越中に入りて

花時に干されて氷見の鯛かな

冬葉

の如き花（春）に對して鯛（秋）をとり合せて詠じてもしもさしつかへはないのであります。繰りかへして述べる事ではありますが、最初から俳句には季を入れなければならぬとか、俳句

は十七文字で切字といふものを置かなければならぬ等と考へる必要は少しもありません、天然自然によつて感じ動かされたことを、最も短い言葉で詠すればよいのであります。

芭蕉に召使はれてゐた下俤に宗次といふ男がいました、生涯にたゞ一句でいゝからいゝ句を作り度いと心掛けて、作つては見て貰ひ作つては見て貰ひしましたが、一度でも芭蕉は賞めて呉れないのであります。或る夏の暑い日の夕方宗次は芭蕉に向つて「お師匠さんとても暑うございますからじだらくにさせていたゞきます。」といつて寝ころびながら句を案じやうとしたのであります。その時芭蕉は、「今お前のいつた言葉こそ本當の俳句だ」といつて

じだらくに寝れば涼しき夕べかな

宗次

といふ句を作つて「猿蓑集卷第二」に入集したのであります。この話はもとより作り話でありませうが、芭蕉の句作境を示したものでありまして、いくら頭を使つてもむづかしく考へても俳句といふものは出来るものでない、俳句は思案の外から生れるといつて、何等心に、はからひの無いときに感じて出てくる言葉に、却つて俳句の内容となるものがあるといふことを教へたものでありませう。

天然自然を前にして、いくら句を作らうと思つて焦慮つても無駄なことでありまして、一塵をとどめぬ、はからひのない胸中鏡に映じてくる相のみが俳諧のまことでなくてはなりません。

柿の花とんぼつる竿でちらしけり

惟 邦

葉がなくてさびしくないか木瓜の花

蘆 外

この二句はいづれも少年の句であります。偽りのない少年の心持が素直に表明されてをりまして、この純真な心持を保つといふことは、詩に携はるもの、最も大切な事でもあります。鬼貫が「俳諧七車序」に「乳ぶさを握るわらべの、花にゑみ月に向ひて指すこそ、天性のまことはあらめかしいやしくも智恵といふものにて、そのあしたを待ち、其夕をたのしとするより、偽のはしとはなれるなるべし。」とはこの間の消息を傳へたものであります。月に向つて指さす天心無垢の心であつてこそ、はじめて自然の本當の相を寫し出すことが出来るのであるが、かういふ風に詠じたらばなどいふやうな、智恵のはたらきが出ては、既にそれは偽の端であるといふのであります。

「機縁」といふことに就いて少し述べませう。

賤母路の檜がくれに辛夷かな

冬 葉

私の故郷に程近い木曾の入口にある賤母山は御料林であります。斧鉞を知らないやうな美林でありまして、その檜や杉の常磐木に交つて珠玉のやうな純白の辛夷の花の咲き交つてをりますのは得も云はれぬ美しさであります。

ふるさとや苗代作る軒の下

冬 葉

木曾のやうな峡谷では、殆ど平地といふものがありませぬから、田は悉く棚づくりであります。苗代が軒の下に作られるといふ珍しい光景に接することが出来るのであります。

河鹿鳴くや釣橋までの夕ありき

冬 葉

いくら木曾でも日中の暑さは同じであります。二階を明放して晝寝をし、夕方目が覺めると裏の笥から落ちる清水で顔を洗つてをりますと、「釣橋まで散歩に行つて來よう。」と宿の子に伴



はれてぶら／＼出掛けます。街道から少しだら／＼と細道を下つて行きますと、そこに釣橋が架つてをりますので、そこで川風に吹かれ乍ら夕涼みをするのであります。山川の瀬音につれて橋下で、涼しさうな聲で河鹿の聲が聞えるのであります。その河鹿の聲をきいてこの句が生れたのであります、河鹿の聲がこの句の生れる機縁を作つたのであります、この機縁がなければ境地があつても俳句は生れないのであります。

篝火に 山霧 ぶろす 踊かな 冬葉

峡中の秋風ははやく、道端の桔梗女郎花、かるかやなどを初めとして、秋草がほつ／＼咲きはじめて、夜は盆踊の稽古がはじまるのであります。寺の庭や草山の裾などで火を焚き、男はかるさんを穿き、女は頬かむりをして「心ぼそいぞ木曾路の旅は笠に木の葉が舞ひかゝる」と唄ひ乍ら踊つてをります。折柄ら一陣の風が来たかと思ふと、忽然として篝火が暗くなつて山霧が吹き風して来たのであります。さうした氣象の變化が機縁となつてこの句は出来たものであります。

月の 奥川 讀書村の 砧かな 冬葉

木曾の溪谷中に八景がありまして寢覺の夜雨、徳恩寺の晚鐘などにつゞいて奥川は月の名所でもあります。そしてその奥川に程遠からぬところに讀書村といふのがありまして「ヨミカキムラ」と讀むのであります。その讀み方に一つの感興を得てこの句が出来たのであります。

朝霧や つり橋渡る人の聲 冬葉

秋になつて驚くのは霧の深いことでありまして、峡中霧を以て鎖しきるやうな事は珍らしくありません。霧の深い朝の感觸は家の内にをりましても判るのであります、さうした朝目を覺してをりますと、樵夫か菌取かが二人三人連れ立つて、つり橋を渡つて行く話し聲が、霧の密度によつて一層よくひゞいてくるのであります。氣象の變化による現象につれての感動が、この句を成すに至つたのであります。

炭焼や 煙こぞりたつ 飛彈の山 冬葉

雪の来た頂きの方からだん／＼山は灰色に變つて枯れて行き、遠い飛彈の連山までも重疊とした山の奥に眠りに入らうとする初冬、小高い山畑へ上つて桑の枝を括りながら遠望しますと、朝

日のさしそめた飛彈の山々に、幾條か炭焼く煙が立ちこぞつてゐるのであります。

ふるさととの山靜なる師走かな 冬葉

都門を逃がれて故郷の山中に正月を送らふと思つて来て見ますと、喧騒な都の師走に引かへて、これは又寂寞そのものゝやうな舊山河であります。

父母の老いゐるたまひし炬燵かな 冬葉

櫓<sup>ぼた</sup>けむりで煤けた梁、傾いた柱や縁、古びた疊、天井の節穴一つまでも忘れることの出来ない自分の生家は、一種云ひやうのない懐しさがあります。その家の一室で炬燵を入れて靜に餘生を送つてゐるわが父母。かうした光景は別に變つたことでも物珍しい光景でもありませんが、作者そのものにとりましては、慌しい都會生活から、急に山間のふるさとへ歸りついた變化の激しさによるところの境涯からして、故郷の山の靜けさに感じ入つたり、炬燵の中に小さく老いゐます父母の姿に感動することが深いのであります。

いくら境涯があつても、それが一句となるにはひたすら機縁の力に待たねばならぬものであり

まして、機縁とは云ふまでもなくインエン、チナミヲリ、シホといふ程であります。

### 題詠に就て（作り方の二）

俳句に於いて季題を課して句を作るといふことは、必ずしも無意義なことではありませんのみならず、その結果に於いては自然靜觀によつて成つた作品より以上を示す場合も多くあるのであります。しかし乍ら、題詠によつて過去の經驗を聯想することには、聯想によつてさまざまの複作用を起して趣向を凝らすことにのみ重きを置くやうになりますから、自然の實體の影が薄くなつて、興味本意に墮し易いのであります。あくまで實經驗による實感の喚起といふことを忘れないことを第一條件として句作せねばならぬと思ひます。

茲に瓜といふ題を課して句作する場合といたします。瓜類は種々ありますけれども單に瓜といへば生食する瓜類でありますから、それらの實經驗によつて作られたる作品に就いて、考へて見ることにいたします。先づ明治時代の句集「春夏秋冬」を見まするに

此村は帝國黨や瓜茄子  
子規

麥藁を枕に瓜の晝寝かな  
格堂

瓜既に冷えてゐるなり晝寝起  
鳥人

魯に大いに諸侯を會の瓜茄子  
露月

瓜畑に南瓜浮名を流しけり  
四方太

麥刈りて瓜の月夜となりけり  
橡面坊

子規、露月の作がいづれも瓜茄子を政治に結びつけたもの、四方太に格堂の作が瓜茄子を擬人化せしめたもの、鳥人の晝寝と瓜の配合の平凡をまぬがれぬもの、かうして見ると、よく實感を詠じてある句は橡面坊の一句だけであります。更に「續春夏秋冬」を見ますと

初生瓜河童に二本流しけり  
師竹

眞桑瓜鄙びて見ゆれ客の前  
碧童

わん／＼と瓜まろびゆく板間かな  
櫻碗子

蟲鳴いて夜は秋近し瓜の味  
挿雲

紫蘇の汁葉蓼の露や瓜もまん  
八重櫻

夜毎瓜盗む人かな狐かな  
春村

瓢に似て立つ尻のあり眞桑瓜  
柿園

八重櫻の紫蘇の汁と葉蓼の露の對照、春村の瓜盗む狐の外は、いづれも瓜頃の氣象の變化を、又瓜の特性をしつかり把握した作品でありまして、春夏秋冬時代より聯想が實經驗を主としてをることが判るのであります。明治四十二年上梓の「日本俳句抄」を見ますと

彼是を好む我是を好む瓜  
櫻碗子

逆さごとの不幸とひけり瓜の宿  
一露

風呂敷に大きな瓜が捨子かな  
北浪

瓜番に贏ち得し賭や瓜二つ  
如佛

第一句の言葉の興味、第二第三第四の句のいづれも、瓜といふ實感から離れて人事的興味に走

らうとした傾向が見えるのであります。これを

熟瓜の香にしめりもつ夜風かな	乙字
瓜畑の瓜ひやゝかに夜明かな	井蛙矣
瓜車盡きて東のしらみけり	東一紅
朝靄の中に瓜市果てにけり	冬葉

これらの句の如く、瓜を主材として氣象の變化を詠じたものと比較して見ますと、人事現象を詠じた句は一見非常に面白いのではありませんが、自然の如き悠久感がありませぬので、その時代を隔てゝ之を見ると、甚しくその價値を損する場合があります。

瓜どころの里人月に遊びけり	冬葉
白日や道にあやまつ瓜ひとつ	同
疲畑や蔓さらへして畚の瓜	同

どこまでも自然を主として人事を従として行くべきであります。次の

月に一棋打ちすてゝ瓜の主かな 冬葉

この句の如き場合、瓜作りの主が月のいゝ夜を幸ひに、友人と將棋を一番さしてさうして再び瓜番に畑めぐりをしに出掛けるといふやうな、人事が主の形になつて自然が従の形になつてゐる句は、一見非常に面白く見られるのでありますが、かうした人事句のもつ興味は、詩としては價値の高いものとは云へないのであります。自然に人事を織り交せて詠ずる事はよろしいのであります。どこまでも自然を主として人事を従とする事を忘れぬやうにせねばならないのであります。

「清水」といふ題を課して句作せんとする時、故郷を都會以外に有つてをるものは、先づ清水による實經驗を喚び起すに、第一に自分の生郷地へその思を馳せるのが通常であります。第二は自分の旅行をして來たあとにその思を馳せるといふ順序になります。句作習練の度が積まれて來ますと、實經驗の概念が交錯したところの對象となつて頭腦に浮んで來るのであります。即ち、幽朶の葉の浸つた清水、山坊の跡の清水、朴の花のうつつた清水、旅人の濁し去つた清水、霧のたつてゐる清水、雨の中の清水、鳥の浴びてをる夕べの清水、岩の中から滴る清水、潮の寄

せ来る磯の清水、とかういふ風にだん／＼尋ねて行くのでありまして、宛ら一笠一杖の旅人の姿の自分が、これらの山海の間を彷徨してゐるありさまで、それらが、悉く俳句になるとは勿論定め難いのであまりすが、機縁の熟して成るものは卒然として纏るのであります。

名句は口からこぼれ出るやうに一氣に詠じられると云ひますが、事實それに近いのでありまして、清水によつて経験したことを、いくら云ひあらはさうと務めても、一單出漕つたものはどうしても出ないものでありまして、それを無理に作る時必ず失敗に終るのでありますから、出漕つたならばその境地を深く捨て、他の経験へ轉換するやうにすることでありまして。さうしてその出漕つた境地のものは他日の句作の場合の機縁を待つといふやうにした方がいゝと思ひます。

経験をありのまゝ詠ずるといふ事は句作上最も大切な事でありまして、ありのまゝを詠じないで概念化してしまふといふことがあります。これは自然靜觀での句作の場合でも同じでありますが、例へば清水は冷いものといふ先入主概念からして

手の切るゝばかりに澄める清水かな

とかういふ句を作つたとすれば、これは清水に對する感想を因襲的概念で述べたものであると

いへるのであります。茲に因襲的概念とは、海棠といへば雨に惱む美人を聯想したり、松といへば千年の齡に例へるといふのに等しい意味であります。

「清水」といへば冷たいといふ概念をもつのが通常ではありますが、必ずしも冷いといふのみが清水に對する概念でもない譯けで、その時と場合と作者の心持ちによつて、さまざまの清水の概念を受るとになるのでありますから、清水といへば冷いといふ一つの概念の内に收めてしまふことはよろしくないであります。一つの俳句は幾つかの概念が集つて一つの俳句の概念をあらはしてをるのでありますが、その一つの俳句のあらはした概念に囚はれることも句作上警めねばならぬ事でありまして、これは既成作品の上の概念ばかりでなくして、あらゆる文藝上の概念に於ける場合も同様でなければなりません。

草	臥	れ	て	宿	か	る	こ	ろ	や	藤	の	花		芭	蕉
な	つ	か	し	き	津	守	の	里	の	若	葉	か	な	牧	童
佛	法	を	裸	に	し	た	る	佛	か	な			許	六	

元祿頃にこれらの作品がありますのに、天明に至りまして

草臥れて宿かるころや隴月  
燕村  
なつかしき津守の里や田螺あへ  
同  
佛法は裸をしめすはじめかな  
同

かうした作品になつてあらはれてをりますのは、その價值の問題は別としまして、既成作品の概念が潜在意識となつてゐたか、或はそれに因はれてをつたかによつて作られたものと見做すべきであります。燕村の如き名手ですら概念に囚はれるといふ事が證據だてられるのでありますから、現代の作家の作品に至つては數へ盡すことの出来ない程多く見受けるのであります。

自然靜觀によつての句作は、比較的既成作品の上に想ひ至るといふ事を許しませぬやうであります。自然靜觀によつての句作は、比較的既成作品の上に想ひ至るといふ事を許しませぬやうであります。散策をすれば、眼前の風物そのものを詠すればよいのであります。又句會や課題で以て作句する場合は、與へられたる題によつて自己の經驗を聯想して句を作るのでありますから、他人の作つた句を載せた句集などの必要はないのであります。たゞ、清水といふ題なれば、山清水、家清水、苔清水、岩清水、草清水、磯清水などいふ、その湧出する場所によつて變化した語を知るといふ必要は拙著の「歳事記」を御覽下さいませればよろしいと思ふのであります。

題によつて自己の經驗を想起してゆきます時、はじめの一句二句は比較的容易に出来るのであります。五句六句と作つて行きます内に、自分の經驗が乏しくなりました非常な苦心慘澹するのであります。その苦心慘澹して境地をさぐる事が、最も大切な句作練習の要諦であります。盡きてしまつた境地を一層深く深く掘り上げてゆく時、はじめて人の未だ掬ひ得た事のない尊い清水を得る事が出来るのであります。そして、最初得た一二句を顧みますとき、それらの句の境地は、幾人もが掬ひ濁した麓の清水である事が判るのであります。

初心者の場合、題詠の最初の一二句の境地が何故に低徊であるのが多いかと申しますと、清水といふ題によつて、直ちに自己の經驗の最も奥なる堂扉を開くといふ、飛躍的着想は出来難いも

ので、先づ常識に近い程度の境地に入ることが通例でありますので、従つて、岩の上に柄杓がのせてあつたとか、草鞋を浸したとか、笹の葉を受けて飲んだといふやうな清水を詠する事が多いのであります。最も、対象なるものがいくらあり觸れたもので常識的なものであつても、その見方なり感じ方の變化によつては立派な作品を得ることが出来るのであります。常識的な境地を何んの變化もない見方なり感じ方をしたものの、例へば

岩のうへに杓そえてある清水かな  
道のべの清水に浸す草鞋かな  
笹の葉を受けてのみけり岩清水

かうした作品であるならば、これは常識の程度を脱することのない低徊なるものといはなければなりません。

岩清水霧たつてゐるはさまかな 乙字  
荷を解けば風のわきたつ清水かな 枯木

松の影濃き磯清水溢れけり 左山  
山蟹のゐて玉を吐く清水かな 冬葉

これらの句も、いづれもその對照は平凡なるものでありますが、その見方なり感じ方に於いて常識の及ばぬものがあります。

佳き清水の句を得んとすることは、恰度佳き清水を掘らんとする井戸掘りの如きものであります。皆同じく鍬を以て自己の經驗としての土を掘り下げて行くのでありますが、初めの内は土が軟かいために樂々と掘つて行かれるのでありますが、その替りその程度で湧き出る水は、誰しもが掬ぶ事の出来る常識に近いまづい水であります。なほ懸命に掘つて行きますと、やゝ美しい水を得る事が出来ますが、自分の希望としての清水を得るには至らないのであります。さうして遂ひには岩層に突き當つてしまひ、その堅さと疲れとに鍬を投げ捨て、仕舞ふのであります。しかし、それでは初志を貫く事の出来ない落伍者でありますから、更に奮起して、鍬の代りに鑿と鐵槌を持つて岩を掘り貫いて、その底から迸り出る清冽を掬ぶことによつて、初めてその苦心に酬らるのであります。

旅人が絶えず掬び濁して澄む事のない麓の清水にのみ低迷してゐないで、十句二十句と作るべく苦心慘膽して、白雲の奥ふかく隠れた清水を探り當てるこそ、課題句作の目的でなければなりません。

## 俳句の變遷

### 芭蕉以前の俳句

山崎宗鑑と共に俳諧建設に功のあつたのは荒木田守武でありまして、當時の連歌が徒にその法式が窮窟で、然も臺閣的文藝であつたのを、平民的狂連歌として世に訪うたのであります。今その作品に就いて見ますれば

飛梅やかろくしくも神の春  
落花枝にかへると見れば胡蝶かな  
守武  
同



花よりも鼻にありける匂ひかな  
夏の夜はあくれどあかぬまぶたかな

同 同

これらの句に見る如く、第一句は飛梅だからかろくしくもといつて、天神様の春にかけ、第二句は地上に落ちた花がもとの枝にかへると見れば、それは花でなく胡蝶であつたといひ、第三句は花の「ハナ」と鼻の「ハナ」に掛け合せたもの、第四句は夏の夜は短く明けけるけれども、あかぬものは自分のまぶただといふ意であります。

かくの如くその詠するところは、梅、蝶、花、夏の夜、など天然自然の現象を對象としてをりますけれども、その目的が全く感情の世界から離れた理智の所産でありまして、地口駄洒落に等しいものであります。

摘まれてはまた叩かるゝ若菜かな 宗鑑  
梅漬は鶯のみのさかなかな 同  
にがくしいつまで嵐ふきの臺 同

月に柄をさしたらばよき團扇かな

同

宗鑑の場合でありまして同様、第一句は摘まれた上に又俎の上で叩かれる七種の若菜といひ、第二句は梅に鶯だから梅干は鶯だけのさかなであるといつたもの、第三句は、露の臺の苦いのにかけて、嵐のいつまでも吹くのをにがくしとしたもの、第四句は圓い月に柄をさしたらばいゝ團扇になると洒落たものであります。

これらの如く守武と同様何等の藝術的價值のない作品のみで、いはゞ俳諧の骸を弄んでゐたに過ぎないのであります。しかし

元朝や神代のこともおもはるゝ 守武  
元日の見るものにせん富士の山 宗鑑

元朝といふ嚴かにしておのづから崇高の念に打たれた結果、その内的緊張によつて、理智のハタラキを許さずして作られたこの二句は、地口駄洒落に等しい作品の中に見出すとき、俳祖守武宗鑑にとつて、唯一の尊き所産であらうと思はるゝのであります。

霞さへまだらにたつやとらの年 貞徳  
 かけてくる春日は馬のあしたかな 同  
 鶯よかけて卵をうめのはな 同  
 氷とくる水はびいどろ流しかな 同

第一句は寅の年だから霞もまだらにたつであらうといふ意、第二句は同じく馬の年の春日は駆けてくるだらうといつたもの、第三句は鶯の卵をうむといふことをうめの花にかけたもの、第四句は氷が解けたのはびいどろを流したやうだと洒落たものであります。

以上の如くそのいづれを見ましても守武宗鑑の作品より以上の駄洒落又は地口に等しいものでありまして、貞徳の以後といつても一々説明を加へませぬが

春永といふや言葉のかざり繩 立圃  
 五月雨は菖蒲刀の砥水かな 同  
 出雲への路錢はいかにびんぼ神 同

この作者の句には氣品に多少見るべきものがありますが、以前として俳諧遊戯の範圍を出てはをりません。

鶯や國栖の翁の笛の弟子 貞室  
 秋風ににげ尻見する螢かな 同  
 朝酒は雪の花見の小袖かな 同  
 咲やらで雨や面目なしの花 重頼  
 曾我菊の其名や五郎弟草 同  
 寒からで心ゆるりの置火かな 同

この兩者の作品も立圃と同じく、同じ駄洒落地口に等しいものではありませんが、どこかに眞面目さのひとすぢがあらはれてゐることが窺ひ知れるのであります。

蓬萊の山はこぶかきところかや 宗因  
 拜むく本尊かけよ時鳥 同

阿蘭陀の文字か横たふ天津雁 同  
白露や無分別なる置どころ 同

この第一句の、蓬萊の山は「昆布」「柿」「野老」「樞」と蓬萊臺の飾物の名を集めて「木深かきところかや」に利かせたところは、地口や駄洒落専門の作品から見れば、非常に理智的であると同時に、相當の學者であることが判るのであります。さればこそこの作者によつて

屋根や時雨谷深くして耳遠し 宗因  
頭巾寒うして北に峨々たる青山なし 同

この如き句風を創始せらるゝに至つたのであります。これを談林派といつて、當時の俳壇はこの流派が大いに風靡してゐたのであります。

芭蕉以前の俳句がいづれも駄洒落地口に等しく、全く一つの遊戯として弄ばれて藝術品として一點見るべきものゝ無い中に、僅に守武宗鑑の元日の二句と、宗因の談林俳句、そして

一僕とほくくありく花見かな 季吟

蛇の介が恨の鐘や花の暮 常矩  
涼しさや竹握りゆく藪づたひ 松意  
簗蟲のいつから見るや歸り花 同  
聞きをれば叩くともなき水雞かな 玄札

これらの句が、よし偶然の作としても見出さるゝことは、大いに喜ぶべきことであらうと思ふのであります。

### 芭蕉時代

芭蕉の俳句は所謂正風として、芭蕉自ら一派をたてるまでは、矢張り貞門談林の俳句とその本質を同じくするものであります。

うかれけり人や初瀬の山櫻 芭蕉  
大比叙やしの字を引いてひと霞 同

武藏野や一寸ほどな鹿の聲 同  
色付や豆腐に落ちて薄紅葉 同  
船の聲波を打つて腸氷る夜や涙 同

これらの句の如く第一句の「うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとはいのらぬものを」の歌から「うかれけり」と「山櫻」にかけたもの、第二句は大比叡にかゝつた霞が、しの字を引いたやうだといふので、これは或法師に大文字を頼んだところ、帯に墨をつけて一氣に「し」の字を長紙に書いたといふ話から趣好をとつたもの、第三句は廣い武藏野に對して鹿の聲は一寸ほどであらうといふ理窟であります。第四句は豆腐の上に落ちた紅葉で多少の情趣はあらはれてをりますが、「色付や」が頗る際どいのであります。第五句の「船の聲波を打つて」は談林調の濃厚なるものであります。この他にもまだ澤山この種の句を見ますが、船の聲の句の出来る一年以前、即ち延寶八年に

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮 芭蕉

この作がありました、枯木寒鴉からその趣好が來てあるにしましても、一種の寂寥感があらはれてをりました、芭蕉の藝術の發露をこゝに見ることが出来るのであります、談林調からまだ脱し得ない時代として、偶然に作られたものと考へるべきものでありませう。

古池や蛙とびこむ水の音 芭蕉

この句は貞享三年、芭蕉が四十三歳の時作られたもので、此句を以て正風開眼だと、芭蕉も門弟も認めたのであります。それだけに古今を通じて人口に膾炙されてをり、又この句を解するに就いて種々なる憶説が立てられたのであります、要するにこの句を有名にせんがための捏造説や、作り話に過ぎないのであります、乙字はこの句に就いて次のやうに述べてをるのであります。

「この句は眼前の光景を其儘あらはしたものであらう。芭蕉としては閑寂幽玄の趣に自得するところがあつたに相違ない。此句を蕪村時代以後の描寫を主とする眼から見れば不完全な句である。何んとなれば、晝の光景か夜の光景かそれも解らず、飛び込んだ蛙は一疋かそれとも引き續き幾疋も飛び込んだのかと、斯う詮鑿をしてくれば素然と何んの味ひもなくなつて了ふ

からである。しかし此淡如たる一句は、作者の胸中止水明鏡の如く澄んでゐて何の心にはからひもなく、物あらば物の影を其儘に映し出す境地を思はしめるのである。こゝに現はれた光景に氣をとられてはいけない。これは寧ろ芭蕉の俳句境を示した句である。即ち表現上の効果から云へばまだ不完全であるけれど、句作用意としての作者の心境を彷彿せしめた句として見る時は、如何にも正法眼藏を開いたものであらう。」

といつてをりますが、寔に至言と思ふのであります。この句の出来る前即ち貞享元年に芭蕉は門人千里を伴つて、八月に江戸を出て故郷伊賀へ歸り、その冬名古屋に於いて、野水、荷分、重五、杜國、正平など、「冬の日」の歌仙をのこし、貞享二年の正月を故郷で迎へ、奈良、京都、大津、名古屋、信濃、甲斐を経て江戸に歸つてをります。その時の記を「野ざらし紀行」又は「甲子吟行」といつてをりますが、その中に

箱 根  
霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き  
名古屋途上  
芭 蕉

草枕犬もしぐるゝか夜の聲 同

熱 田 年暮れぬ笠きて草鞋穿きながら 同

奈 良 水取やこもりの僧の杵の音 同

逢 坂 山 山路来て何やらゆかし菫草 同

甲斐山中 行く駒の麥になぐさむやどりかな 同

歸 庵 夏衣いまだ風をとりつくさず 同

など藝術的價値の高い作品をのこしてをるのであります。就中

山路来て何やらゆかし葦草

この句は内容と云ひ表現法と云ひ、古池の句に一步も譲らぬ佳作であります。何故にこれらの句より後に出来た古池の句を以て、正風開眼の作と自他共に許したのは、あるが儘を觀るといふ以外に何等の意味もないところに大きな意味を發見したのが、古池の句によつて芭蕉が初めて體得し、自覺したからであります。

なほ「野ざらし紀行」には

馬に寝て残夢月遠し茶のけむり

芭蕉

三十日月なし千とせの杉を抱くあらし

同

この如き談林調の明らかな作がありますところから、まだ芭蕉は俳句に對して、確たる目覺めが無かつたものと見るべきであります。芭蕉が江戸へ上つてから初めての歸省の旅であつて、その間八九年の間に變つた彼の境遇に映じてくる、大自然の相がしらす／＼の内に談林調の擡頭を押へて、かくは立派な作品を生み出すに至つたものと考へらるゝのであります。

貞享五年から元祿元年へかけて、芭蕉は宗七、宗無と共に伊勢國阿波の庄大佛寺に詣で、それより大廟を拜し、舊知をたづねて故郷へ戻つたのであります。さうして豫ての約束を踏んで伊良古岬から杜國が訪ねて來たのを幸ひ、大和の名所をめぐり、吉野の花に遊び高野山に詣でたのであります。その紀行が「笈の小文」であります。

伊勢山田

何の木の花とはしらす句かな

芭蕉

故主君蟬吟公の庭前にて

さま／＼の事おもひ出す櫻かな

同

丹波市

草臥て宿かるころや藤の花

同

初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

同

臍峠

雲雀より上に休らふ峠かな 同

西河

ほろくと山吹ちるか瀧の音 同

高野

父母のしきりに戀し雉の聲 同

などの佳作をあげる事が出来まして、「さまざまの」一句は、よく遁世以前の懐舊の情の切なるものがあらはれてをり、「草臥れて」の吟は、感じの最も深く自然にしみ入つた句であります。その他の句に就きましても、いづれも天然自然を靜觀することに、その土臺をしつかりと据ゑたものといふ事が出来るのであります。

元祿二年芭蕉の四十六歳の時、門人曾良と共に深川の庵を船で出發し、千住に上つて、先づ初夏の日光に參拜し、それより那須野をよぎり白河の關を越え、須賀川を経て仙臺から松島に遊び、平泉に藤原三代の榮華の跡をとぶらひ、尿前の關より出羽に入り、羽黒、月山、湯殿の三山をきはめ、最上川を下つて酒田に出で、象瀉に吟魂をなやまし、北陸の一路を七月加賀に至り、

金澤の北枝等と山中温泉に浴し、こゝで曾良と別れ松岡にて北枝と袂を分つて、福井を経て美濃大垣に着いたのであります。前後百六十日、實に六百里の大旅行でありまして、この紀行を「奥の細道」といふのであります。

那須

野を横に馬ひきむけよほとゝぎす 芭蕉

高館

夏草やつはものどもが夢の跡 同

立石寺

閑さや岩にしみ入る蟬の聲 同

最上川

五月雨をあつめて早し最上川 同

出雲岬

荒海や佐渡に横たふ天の川 同

加賀國入る途中

早稻の香や分け入る右は有磯海 同

途中吟

あかくと日はつれなくも秋の風 同

那谷寺

石山の石より白し秋の風 同

芭蕉はこの大旅行に出て間もなく磐城國飯塚（今の飯坂）で持病が起つたのでありました。この前後の事を

「五月朝日の事なり。其の夜飯塚に泊る。温泉あれば湯に入りて宿を借るに、土坐に蓆を敷きて怪しき貧家なり。灯も無ければ、圍爐裡の火影に寢所を設けて臥す。夜に入りて雷鳴り雨頻りに降りて、臥せる上より漏り、蚤蚊に撈られて眠られず、持病さへ起りて消え入る許りな短夜の空も漸く明くれば、又旅立ちぬ。猶ほ夜の餘波心進まず、馬借りて桑折の驛に出づる。遙かなる行末を抱へて、斯る病ひ覺東なしといへど羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道

路に死なん、是れ天命なりと、氣力聊か取り直し、路縦横に踏んで伊達の大木戸を越す。」とかう書いてをります。涙の出るやうな悲痛な言句でありまして、この大きな覺悟があつてこそ、この大旅行は遂げられ、又芭蕉一代の大藝術を生み出すことが出来たのであります。わけても「夏草や」「閑さや」「五月雨を」「荒海や」「早稻の香や」「あかくと」の諸句はその絶唱であります。

なほ元祿時代の作家の代表作を擧げて見ますと

芳野山

明星や櫻さだめぬ山かつら 其角

木母寺に歌の會あり今日の月 同

この木戸や鏡のさゝれて冬の月 同

湖の水まさりけり五月雨 去來

涼しさよ夕立ながら入日影 同

應々といへどたゞくや雪の門 同



相撲取ならぶや秋の唐錦 嵐雪  
 黄菊白菊その外の名はなくもがな 同  
 蒲團きて寝たる姿や東山 同  
 大原や蝶の出てまふ朧月 丈草  
 背戸口の入江に上る千鳥かな 同  
 貧交  
 交りは紙子の切を譲りけり 同  
 更けゆくや水田の上の天の川 惟然  
 翁に別るゝとて  
 別るゝや柿くひながら坂の上 同  
 鶉の糞の白き梢や冬の山 同  
 越より飛驒へゆくとして籠の渡の危きところ／＼道もなき山路にさまよひて  
 鶯の巢の樟の枯枝に日は入りぬ 凡兆  
 一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子かな 同  
 下京や雪積む上の夜の雨 同  
 佛法を裸にしたる佛かな 許六  
 宇津の山  
 十圍子も小粒になりぬ秋の風 同  
 大髭に剃刀のとぶ寒さかな 同  
 越中庄の川源飛驒の山中より出づ幾谷の岩間をくゝりて漲る流奔の如し、  
 このほとりに雄神の聚祠あり、庄川は庄の在處ある故也、然は雄神川なる  
 べし。夫木集第二十四に俊頼卿の歌あり、暮春の一日こゝに遊びて各をか  
 み川の句を探る  
 奥ふかに巢鷹の鳴くや雄神川 浪化  
 麻がらを踏み折る背戸の月見かな 同  
 瀬の音の二三度かはる夜寒かな 同  
 静かさは栗の葉しづむ清水かな 尙白

茶畑や二葉の中の蟲の聲  
 同  
 風や里の子覗く御輿部屋  
 同  
 田を賣りていとゞ寝られぬ蛙かな  
 北  
 居りかはる羽音涼しや森の蟬  
 同  
 橋のならばぶや霧の向ひ鳥  
 同  
 鶯や足袋はきかゝる障子越  
 牧・童  
 小家つゞき垣根々々の黄菊かな  
 同  
 縁に置く手燭にさはる落葉かな  
 同  
 大佛のうしろに花のさかりかな  
 路通  
 芭蕉葉は何になれとや秋の風  
 同  
 鳥共も寝入つてゐるか餘吾の湖  
 同  
 大峯や櫻の底の雉の聲  
 李由  
 名月は蕎麥の花にて明けにけり  
 同  
 水鳥も寝あたまゝまるか静なり  
 同

傾城の畑見たがる董かな  
 涼菟  
 扉越しに大工遣ひや桐の花  
 同  
 散りそめて紅葉に寒し東福寺  
 同  
 提燈の空にせんなし時鳥  
 杉風  
 かつくりとぬけそむる齒や秋の風  
 同  
 しぐれつゝ空にわたれる入日かな  
 同

この外に野波、支考、千那、木導、木因、智月、酒堂、園女、桃隣、正秀、乙州、曾良、荷  
 兮、移竹、乙由、その他の名ある作者がありますが、元祿の俳風を大體に知るには、如上の作品  
 をよく味へば判ることと思ひます。

貞享三年芭蕉が「古池」の句を作つて正風開眼の大革命を樹立しまして以來、元祿二年出版の  
 「あら野」元祿三年出版の「ひさご」元祿四年出版の「猿蓑」元祿七年出版の「炭俵」芭蕉の歿  
 後出版になりました「續猿蓑」と、さうして開眼以前即ち貞享元年出版の「冬の日」貞享二年出  
 版の「春の日」の七冊を併せまして、芭蕉七部集とし、元祿の俳風はこれによつて知ることが出

來ます。就中、「猿蓑」は去來、凡兆の二人が選したものを芭蕉が再選したものでありまして、正風の精華とも見らるゝべき唯一の句集であります。

芭蕉以前には俳諧の存在はあつても、それは實に名目だけの存在といつてもいいのでありまして、俳句をして文學としてその價值をつけたものは、實に芭蕉の力に外ならないと思ひます。

芭蕉は俳諧の内容に最も重きを置いた、所謂金科玉條としてのさびしをりは連句の上に於いていはれたものでありますが、一個の俳句の上に見ましても勿論大切な金科玉條でありまして、芭蕉臨終の砌り門人達が夜伽の俳筵を催したのでありますが、その一節に

闇とりて茶飯たゝかす夜伽かな	木 節
皆子なり蓑蟲寒く鳴きつくす	乙 州
うづくまる藥のもと寒さかな	丈 艸
吹井より鶴をまねかん初時雨	其 角

「一々惟然吟聲しければ、師、丈艸が句を今一度と望みたまひて、丈艸出來されたり、いつ聞いてもさびしをり整ひたり、面白し面白しと、しは噉れし聲もて讚めたまひにけり。」

「花屋日記」が正しきものか然らざるものかといふ事は別といたしましても、「うづくまる藥のもと寒さかな」この句のもつさびしをりは、正風の俳諧の内容を立證するものであると考へらるゝのであります。

### 正風俳句の内容

芭蕉の俳諧で最も重用視せられた、さび、しをり、ひゞき、にほひ、わび、といふやうなものはどうしたところをさしていふのかといひますと、閑寂を旨とする自然を靜觀によつて生れてくる句のもつ内容のそれとありまして、これは俳諧に於きましては特にやかましくいはれてをります、これは東洋藝術の各種に於いても現はれてをるのであります。茶道などに於きましても、寂、佗、澁味は大切のものとしてをりまして、佗とは最少限度の物によつて満足する心境でありまして、椿の花の一種で佗介といふのがありますが、此花は散るまで半開きのやうな形であるので、茶人に愛用されるのであります。この花の開き切らない姿に對して、開き切つた花より以上の尊さを感じるのでありまして、眼に見るばかりの美でなく心持ちで見る美をさ

していふのが佗であり寂であるのであります。

交りは紙子の切を譲りけり  
飼猿の引窓つたふ時雨かな  
丈艸 其角

かうした作品に於いてさびしをりを味はふ事が出来ませうし、又

から鮭にくひさかれたる紙子かな  
越後屋にきぬさく音や更衣  
木導 其角

これらの作品にはひびきを感じる事が出来ます。

廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎  
蚊遣火や蚊帳つる方に老ひとり  
史邦 其角

この種の作品にはわびの思ひが十分にあらはれてをります。

唇に墨つく兒のすゞみかな  
大原や蝶も出て舞ふ朧月  
千那 丈草

これらの作品には又にはひびが窺はれるのであります。さうして

菜畑や二葉の中の蟲の聲 尙白

この句の如きほそみを見ることが出来まして、かうした自然静観によつて作者のそれ／＼の性格美がその時と場合とによりまして、さび、しをり、にほひ乃至わびといふ内容を作り示すのであります。

芭蕉が、俳句にかうした内容を必要と認めたのは、何が故であるかといひますと、芭蕉の研究者としての西行、宗祇、世阿彌、利休、雪舟等の影響と、又一方参禅によつて體得したところの幽玄、枯淡等によつて大成されてゐるものと考へられます。

芭蕉の研究した一人である、謡曲文學を大成した世阿彌の論に、花實の論といふのがありまして、それは實のみに就けば寫生となり、花にのみつけば空想になる。實を踏んでの花の心は句の